ソニー幼児教育支援プログラム

「科学する心を育てる」

実践事例集

2004年度・平成16年度

財団法人 ソニー教育財団

はじめに

ソニー幼児教育支援プログラムは、「科学する心を育てる」を主題として、3歳～5歳児の子どもたちが、人や自然との様々なかかわりを通して、思いやりの心や豊かな感性を育み、創造性の芽生えを育むことをめざしています。そのため、全国の幼稚園・保育園から実践と計画を募集し、優れた内容を支援し、発信して広く他園の参考にしていただくことに取り組んでいます。

2002年度52園、2003年度65園のご応募をいただき発展してきましたが、入選園の論文には優れた実践やユニークな取り組みが沢山あります。こうした取り組みに光を当て、幼稚園・保育園の先生方に役立てていただくことが大切だと考え、実践事例やアイデア・工夫を冊子にまとめ、この度、「科学する心を育てる・実践事例集」を作成しました。

「科学する心を育てる」について、幼稚園や保育園の先生方がどのように考え、捉えているのか、子どもたちが身近な自然や遊び、人とのかかわりを通してどのように育っているのか、また保育を深める様々な創意・工夫など、入選園20の幼稚園・保育園から27の事例を紹介しています。

今回の事例集でご紹介できた園はほんの一部ですが、ソニー幼児教育支援プログラムには、全国各地の幼稚園・保育園から様々な実践報告が寄せられています。自然豊かな園だけでなく、都心の小さな園でも、それぞれの園の特徴を活かした創造的な保育を展開していらっしゃいます。

「科学する心」とはどういう心なのか、また、子どもたちの「科学する心」はどのように育まれるのか、さまざまな取り組みを通して、皆さんで一緒に考え深めていくために、ご活用いただければ大変幸いに思います。

財団法人 ソニー教育財団

■「ソニー幼児教育支援プログラム」について

当財団は、40年間行ってきた小中学校の教育支援「ソニー教育資金」を終了し、21世紀が始まった2001年度より新しく「ソニー子ども科学教育プログラム」としてスタートしましたが、その折、就学前の子どもの教育の大切さを考え、新しい試みとして、幼稚園・保育園の部門を設けました。

そして、翌年2002年度に「ソニー幼児教育支援プログラム」として独立し、子どもたちの教育に情熱を持って取り組んでいる幼稚園・保育園を支援するための活動を展開しています。活動の概要については、ホームページをご覧下さい。

http://www.sony-ef.or.jp/preschool/

もくじ

1章「科学する心を育てる」とは …… 2

1. 自然とのふれあいを通して「科学する心」を育てる（八幡東幼稚園）…… 2
2. 人とふれあい、自然とかかわる中からの「科学する心」（高島幼稚園）…… 3
3. 感じる心・探究心・命の尊重から（もいわ幼稚園）…… 4
4. 「科学するって何？」ー遊びの中の学びを通しての検証ー（二葉幼稚園・二葉つぼみ保育園）…… 5

2章「科学する心を育てる」実践事例

A. 自然の中に「科学する心」がある …… 6

A-1. 「あっ　うごいた　わぁーうまれた（チャボ）」（福地北部保育園）…… 6
A-2. 「園庭探索団ー蜂がお山を作った！ふしぎ　ふしぎ」（大野町保育園）…… 7
A-3. 「せみって目がキラキラしてるで」（常磐会短期大学付属泉丘幼稚園）…… 8
A-4. ジャガイモの収穫（山鳩保育園）…… 10
A-5. ビオトープ作り（もいわ幼稚園）…… 12
A-6. 若葉の森探検（会津若葉幼稚園）…… 14
A-7. 平和台探検隊（よいこのもり保育園）…… 16
A-8. 台風翌日の様子＜さくら探検隊＞（南さくら保育園）…… 18

B. 遊びの中に「科学する心」がある …… 20

B-1. 「蒲鉾板で遊ぼう」（八幡東幼稚園）…… 20
B-2. 「あっ、ここ船が通るじゃん！」（富士松南幼稚園）…… 22
B-3. 「こうやると おもしろそう！」（宇都宮大学教育学部附属幼稚園）…… 23

C. 人や地域とのかかわりの中に「科学する心」がある …… 24

C-1. 「ホタルってすごいな」（高島幼稚園）…… 24
C-2. 「おにいちゃん、おねえちゃんと一緒に遊ぼう」（八幡東幼稚園）…… 26
C-3. 「メロンの赤ちゃんができたよ」（小垣江東幼稚園）…… 28
C-4. 「虫博士がやってきた！」（西戸山幼稚園）…… 29

3章「科学する心を育てる」創意・工夫 …… 30

1. 五感を拓く　もりのみち作り（二葉幼稚園・二葉つぼみ保育園）…… 30
2. みんなで育てよう科学する心　実践カレンダー（二葉幼稚園・二葉つぼみ保育園）…… 31
3. 豊かな自然体験と絵本とのかかわり（江戸川双葉幼稚園）…… 32
4. ペットボトル大作戦（小垣江幼稚園）…… 34
5. 園外保育（みくに幼稚園）…… 35
6. 子どもの感性を揺さぶる「科学遊び」ー現場の教師のとまどいー（こまどり幼稚園）…… 36
7. 実践してわかったこと（加曽利幼稚園）…… 37
8. 科学性の芽ばえを培う豊かな環境づくりを求めて（常磐会短期大学付属泉丘幼稚園）…… 38

掲載園リスト …… 39

備考　＊ここでご紹介した事例は、ページ数の関係で一部抜粋・要約しています。
＊注目していただきたい点を、各ページの「ポイント」にまとめています。

Ⅰ章「科学する心を育てる」とは

私たちは、幼児期の子どもたちが「すごい！ふしぎ！」「なぜ？どうして？」と感動したり、想像したりすることや、命の大切さに気づいたり、遊ぶ喜び、学ぶ喜び、共に生きる喜びを感じることが大切だと考え、「科学する心を育てる」というテーマを掲げました。

ここでは、それぞれの園がどのように「科学する心を育てる」を考え、園の考えや理念と結びつけたのか、また、その考えを日々の保育の中でどのように実践していくかについて、様々な視点や捉え方を紹介します。

1. 自然とのふれあいを通して「科学する心」を育てる
八幡東幼稚園（福岡県北九州市）

2002年度、研究主題「科学する心を育てる保育の実践」を次のような「研究の構想」、「研究推進の具体的方策」のもとに推進した。そして、2002年度の実践を通して「科学する心を育てる」ために、この研究の構想や具体的方策が重要であることを実証することができた。そこで、2003年度もこの基本的な考えのもと、さらに研究を進めていこうと考えた。

幼児期は、五感を通して回りの環境を感じる時期である。そのような幼児たちが、美しさや不思議さを秘めた自然に触れ、体全体で感じる体験を豊かにすると、幼児の「心」は様々なものを感じ取り動き始める。そのように幼児の「心」が感じ、動くときに「科学する心」は芽生えると考える。そこで、幼児の「心」が動くような環境や援助をすることが「科学する心」を育てることになると考えた。

本園では「科学する心」を次のようにとらえている。

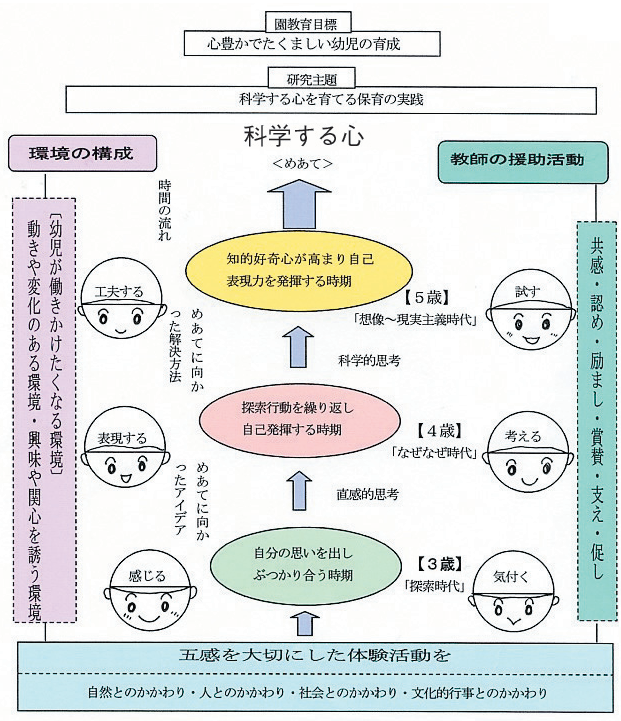
科学する心

- ○ 美しさや不思議さに驚き感じる心
- ○ 気付いたり、考えたりする心
- ○ 「おや、なんだろう」と不思議に思う心
- ○ “めあて”に向かって考え続ける心
- ○ アイデアを出し工夫する心
- ○ 繰り返し試したり挑戦したりする心
- ○ 好奇心や探究心をもって追求する心
- ○ 夢中になって浸りきって遊ぶ心
- ○ 友達や人と刺激し合って活動する心

〔研究推進の具体的方策〕

（方策1）五感を刺激する直接・具体的体験を大切にする。
（方策2）春・夏・秋・冬と時間の流れの中で自然体験を積み重ねる。
（方策3）3歳、4歳、5歳の発達の特性をとらえて、活動内容や環境の構成や教師の援助の在り方を探っていく。
（方策4）様々な人とかかわり、共に体験することを大切にする。

〔科学する心を育てる研究の構想〕



ポイント

八幡幼稚園では、「科学する心」とはどのような心を表しているかを定義し、「科学する心」を育てるための具体的な方策を立てています。園の子どもたちの姿と「科学する心」をどのように結び付けて考えたか、ということが分かり易く整理されています。

2. 人とふれあい、自然とかかわる中からの「科学する心」
高島幼稚園（岡山県岡山市）

本園の教育目標

輝くひとみ　あふれる笑顔

・思いやりのある子ども　・よく考える子ども　・がんばる子ども

研　究　主　題

地域の人とふれあい、自然とかかわる中で科学する心を育てる

＜豊かな人間性＞
・様々な体験を通して、人や物事に対して心を動かしかかわる。
・命を大切にする心、人を思いやる心、自然や美しいものに感動する心などの道徳心や感性をもつ

＜自分を高める＞
・思いを表出しながら、自己を発揮する。
・何事にも意欲的に取り組み、やり遂げようとする。
・様々な体験を通して、自分で考え判断して行動する。

＜共に生きる＞
・人とのかかわりを喜び、思いを伝え合いながら生活する。
・豊かな環境や自然に触れたり感じたりしながら、よりよく生きようとする。

指　導　の　重　点

・地域の自然や人とのふれあいを通して、豊かな心情や創造力を培うように努める。

研　究　の　視　点

園内や地域の自然環境を生かす	人とのふれあいにより、自然体験を豊かにする	探求する楽しさ、発見した喜びや感動が味わえる援助を工夫する
家庭へは ・参観日、ふれあいデーを通して、園内や地域の自然の中で一緒にすごす楽しさを感じてもらえるようにする。	**幼稚園では** ・友達の気持ちに共感したり地域のいろいろな人とふれあって遊ぶことを楽しんだりして、思いやりの気持ちがもてるようにする。 ・園外に出かける機会を多くし、地域の自然に親しみや感動する気持ちがもてるようにする。	**地域社会へは** ・地域の行事や活動を保護者に知らせ、地域の人との交流や豊かな自然にふれる機会が多くもてるようにする。 ・子どもとふれあう楽しさが感じられる機会を通して、地域の人みんなに子育てを支えようという気持ちをもってもらえるようにする。

ポイント

高島幼稚園では、園でのさまざまな活動の中から「地域の人とふれあい、自然とかかわる中で科学する心を育てる」という研究主題を掲げました。園の教育目標から研究主題を絞り込み、具体的な視点を持って、実際の活動へと展開されています。

3. 感じる心・探究心・命の尊重から
もいわ幼稚園（北海道札幌市）

本園では研究主題を「子どもたちの豊かな生活を求めて」と掲げて研究を進めている。

研究主題の「豊かさ」のおさえについては広範囲であるため，研究を進め，深めていくためには「豊かさ」の視点を絞っていくことが必要である。そこで、“感じる心” “探究心” “命の尊重” の3つの視点から研究を進めることとし、以下のようにおさえていくことを確認した。

【豊かさの3つの視点と「育ち合い」との関連】

≪感じる心≫
- 五感を大切にする姿
- 主体的にいろいろな環境にかかわって，喜怒哀楽や悔しさ，うれしさを感じる姿
- 遊びの満足感や充実感を味わう姿
- 友達のよさに気付き，仲間に優しくできる姿
- 季節の移り変わりに気付き，感じ取っていく姿
- 人の痛みを感じていく姿　など

≪命の尊重≫
- 自分を大切にする姿
- 友達を大切にする姿
- 人を受け入れたり，受け入れられたりすることの喜びを感じる姿
- 身近な動植物に触れること，世話をすることで，命があることに気付く姿　など

≪探究心≫
- 「おやっ，どうしてだろう」と心を動かす姿
- 好奇心をもち，さらに興味を広げていく姿
- 試したり工夫したりする姿
- 愛着の気持ちをもって繰り返しかかわる姿　など

それぞれの視点が関連し合って，
幼児同士の育ち合いにつながっていく。

【これまでの研究で分かってきたこと】

●自然事象や自然環境を生かす
自然事象や自然環境をタイミングよく保育に取り入れていくことは，幼児に自然を身近なものとして感じさせ，豊かな感情体験を味わわせることにつながるということが分かった。

●自分の思いを出し合える関係作り
幼児が自分の思いを表せるよう，また，その思いを友達に伝え合えるような関係をつくっていくことが大切である。そのためには，幼児の自由な思いや感じ方を受け止めようとする，教師の姿勢が重要である。

●五感を通した直接体験
教師は正しい答えを引き出そうとするのではなく，幼児が五感を十分に使い，直接体験をすることで自分なりに気付いたり，感じたりしていく姿を見守ることが大切である。そのためには，幼児の興味や関心を把握し，そこに寄り添いながら援助していくことの重要性が分かった。

●保育の計画と柔軟性
偶然生まれてくる幼児の遊びを，教師は自分の考えにあてはめることなく柔軟に対応していくことが大切である。また，偶然を待つだけではなく，教師が意図的に気付かせたいことを遊びの中に取り入れ，働き掛けていくことも必要である。

●幼児の力を信じる
幼児はいろいろな直接体験を通して，様々な現象に気付いていく。そのためには教師は幼児の力を信じて，いろいろな経験ができる環境の構成を行っていくことが必要である。

●見えないものを見ようとする力
幼児の生活を豊かにするということは，幼児に「見えないものを見ようとする力」を育てていくことになるのではないかと感じた。「見えないものを見ようとする力」は，幼児の想像性をかきたて，好奇心をふくらませることにつながるのではないか。

ポイント

もいわ幼稚園では、「感じる心」・「探究心」・「命の尊重」の３つの視点を通して「科学する心」を育てようとしています。今までの実践の積み重ねの中から子どもたちの姿を丁寧に捉え、教師の姿勢や環境の構成など実践をする上で大切なポイントを明確にしています。

4.「科学するって何？」ー遊びの中の学びを通しての検証ー
二葉幼稚園・二葉つぼみ保育園（東京都品川区）

昨年度より、遊びを通して育まれる気づきや発見などの知的な側面に着目して「科学する心」を探ってきた。二年次は、幼児の園生活で出会う様々な出来事や身の周りの事象に主体的にかかわる姿を3歳から5歳ごとに記録をし、「事例」の中から「科学する心」を検証してきた。

幼児にとって遊びは生活そのものであり、遊びを通して多くのことを感じ、考え、学習していく。そして、これらの学習＝学びが“科学する心”につながることが、幼児の様子をとらえた事例を検討することで明らかになってきた。

そして、遊びの中のさまざまな経験を通して、幼児一人一人の中にいろいろな物事に対する興味関心、好奇心、探究心、気づき、発見、挑戦などの気持ちが養われていくことがわかってきた。“遊びの中に広がる科学する心”をもとに、次年度のプログラム作りに取り組み、「感じ、考え、実現できる幼児の育成」を目指して環境作りをしてきた。

遊びの中に広がる科学する心について

遊びの中での学びと「科学する心」につながる幼児の姿を前年度の研究を基に①～⑥の視点で整理した。そして、実践事例から遊びの検証を重ねて、「科学する心」を育むための環境や援助のあり方を検討し実践してきた。その視点は下記のとおりである。

① **興味・関心、経験からの発見：**「あれー！」
「なんだろう？」

② **模倣、先行体験と結び付けての比較：**「‥と同じ」
「‥みたい」

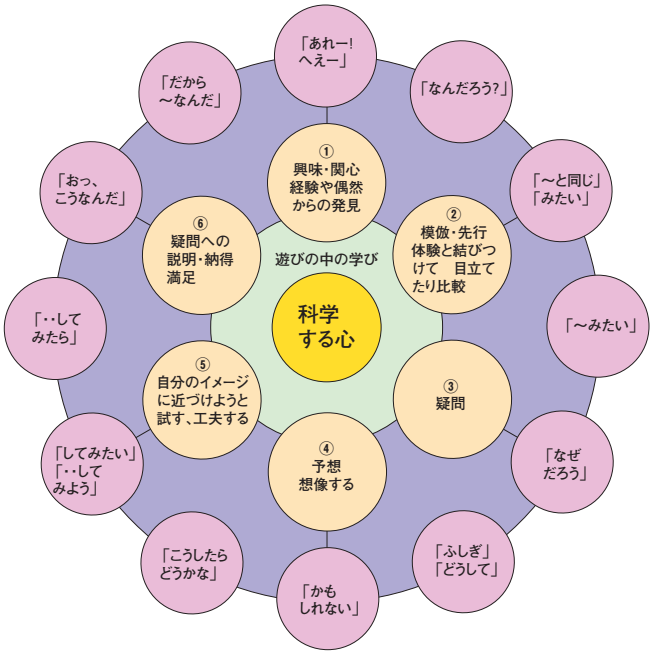
③ **疑問：**「なぜだろう？」「どうして」「不思議」

④ **予測、創造する：**「‥かもしれない」
「こうしたらどうかな？」

⑤ **自分のイメージに近づけようと試し・工夫：**
「‥してみよう」「‥してみたら」

⑥ **疑問への説明、納得、満足：**「おっ！こうなんだ」
「～だから」「～なんだ」

〈科学する心と遊びの中の学び〉



科学する心を育てるための環境についての考察

事例の検証から環境について改善計画を立て、「科学する心を育てる」ために学びを豊かにする環境とは、動機付けが多く心を動かす環境、繰り返し試すことができる環境、受けとめる教師であると考え、以下のような環境作りをしてきた。

- 感じ・考える環境・・・もりのみち作り
- 発達に応じた遊び場作り・・・つぼみガーデン
- 自然を呼び込む環境作り・・・にこにこ通り

これらの実践から、さらに「科学する心」を育てるための環境作りに大切なことを考えた。

- 遊びを通して発見し、その経験を重ねてさらに高い発見をしていく。→創造性
- 遊びの中で人とどうつきあわねばならないのか学ぶ。→人間関係
- 五感を揺さぶる→情緒性と感覚の開発

創造性、**人間関係**、**情緒性**と感覚が育つような環境作りをしていくことが、科学する心を育てるために大切なことであると考え、次年度の課題にすることにした。

ポイント

二葉幼稚園・二葉つぼみ保育園では、事例の中から「科学する心」を検証しました。「科学する心」につながる子どもの姿を6つの視点から捉え、さらに環境についても見直しています。そこで考察した内容が、「科学する心を育てるための環境作り」に生かされています。

2章「科学する心を育てる」実践事例

子どもたちの「科学する心」は、どのような場面で育っていくのでしょうか。

自然の中で驚き、感動する。遊びの中で疑問を持ったり工夫したりする。人とのかかわりを通して好奇心を膨らませていく。こうしたさまざまな場面で、子どもたちの「科学する心」が育っていきます。

第2章では、各園が捉えた「科学する心を育てる実践事例」を次の3つのパートに分けて紹介します。

A. 自然の中に「科学する心」がある　B. 遊びの中に「科学する心」がある　C. 人との関わりの中に「科学する心」がある

A. 自然の中に「科学する心」がある

A-1.「あっ　うごいた　わぁーうまれた（チャボ）」
福地北部保育園（愛知県刈谷市）　＜9月＞

ねらい　ひなの誕生を通して生命の大切さを知る

場　面：チャボの卵からひよこが生まれる様子を見ている時

事　例

■9月3日

子どもの言動・状況	保育者の思い	保育者の行動
①チャボの卵を親がつつき、中からも、ひなが出ようとする姿をクラスの皆と一緒に見ている。心配そうな表情で、卵が動いたり、殻が少しづつ割れる度に「あっ」と声を出し、ジーと見ている。途中、他児よりガンバレコールがありA子も同様に応援する。	②真剣に見て心より応援しているなあ。でも親に刺激を与えてしまうかもしれない。	③「お母さんも、ひよこもがんばってるね、あまり大きな声を出すとびっくりしちゃうから、そーっと見ていようね」
④ガンバレコールが止み、「目が見えた」「あっ！また動いた」等、生まれるまでの様子を他児同様につぶやきながら、ジーと見る。「わぁー生まれた！」とA子他児喜ぶ。「あんな狭い卵の中に入ってたじゃないみたいだね」とA子。	⑤こうして生まれるんだすごいなあ。今まで生まれたひよこの殻は見当たらないが殻はどうなるのだろう。子どもたちに投げかけてみよう。	⑥「うまれたね、よかったね」と共感し「殻ってどうなるのかな？」
⑦「殻はお母さんが食べてるよホラ！」とA子。「わかった！殻があるとけがをするから食べてあげるんだよ」「そうだね」と子ども同士の会話「濡れてた羽がちょっと乾いてきたよ」「本当だ、大きくなつたみたいだね」と変化を逃さず興味深々にみている。	⑧思いや観察力に感心する。	⑨子どもの言葉や思いに共感し見守る。

考　察

今までいくつもの卵から、ひながうまれたのは知っているが、ふ化の瞬間を見たのは初めであった。A子を含め、みんな真剣に様子を見ており、無事、生まれてくるよう応援したり、少しずつの変化に驚きが見られた。生まれた時は本当に嬉しそうに「かわいいね」とつぶやくA子。「ひなが生まれやすいようにお母さんが卵をつついて、お手伝いしてあげたんだね」と今日の様子を見て、お母さんの役割にも気づいた様子であった。タイミングよく貴重な感動体験ができた。卵のふ化という生命の誕生を目のあたりにした感動は子どもたちの心の中に熱く、しっかりと響いたと思う。自分たちで餌やりをし、世話をしているだけにひなの誕生は特別なものとなり、何ものにもかえがたい体験となった。

ポイント

卵からヒナがかえる瞬間を、子どもたちがくぎ付けになって見ている様子が印象的です。生命の尊さは、子どもたちが、ただその瞬間に立ち会えただけでなく、日頃からチャボに心を配り、かわいがるという体験によってより深く培われていくのではないかと思いました。子どもたちが心を動かす感動体験をたくさん体験するようにという心配り感じられます。

A-2.「園庭探索団 ー蜂がお山を作った！ふしぎ　ふしぎ」
大野町保育園（石川県金沢市）　＜5歳児　7月＞

ねらい　園庭の自然の変化に気づき、発見する喜び、好奇心、探究心を高める。

事　例

◎場所の不思議

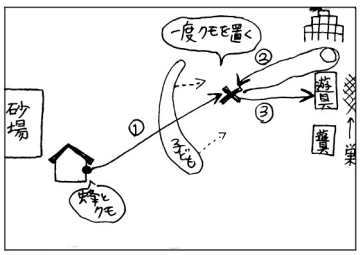
数人の子どもが、園庭の隅にしゃがんで「先生、こっち来てー！！」と呼ぶ声がした。「蜂、なんか山みたいの造ってるよ。」と言う。見ると、黒く3cmほどの蜂が穴から土を運び出し、山のように積み上げていた。その様子を見ていると、「何でこんな草ぼうぼうな所に穴掘るのかな？」と言う子がいたのに対し、「砂場の方が掘りやすいよ。」との声がきこえてきたので、「じゃあ、砂場と、園庭の真中と隅っこの砂掘りのくらべっこしようか。」と声をかけてみた。シャベルで砂場に穴を掘り、山を造ってみる。「あ、手でもすぐ掘れるよ。」と指で掘る子もいた。出来上がったところで、じょうろに水を入れ、山にかけてみた。すると、「あーあ」と子ども達。水をかけたことで山は崩れ、穴は広がって水がたまってしまったのだ。「すぐ掘れたけど、すぐ壊れたね。」「よし、真ん中は？」と園庭の真ん中を掘ってみるが、一粒一粒の砂が大きくかたい為、掘りにくい。「シャベルだったら掘れるけど、蜂の足だったら折れてしまいそう。」「次、隅っこ掘ってみよー！！」とシャベルや、指で掘りはじめ、「砂場みたいにやわらかくないね」「でも、真ん中みたいにかたすぎないし大丈夫だね」と話し合う声が聞かれた。よく見ると砂と小さな砂利がまざっていることがわかった。最後にじょうろの水をかけると、砂利や、周りの草のおかげで山や穴が崩れにくいことを知り、「なんか、3匹のこぶたの家みたい！」「ここが一番いいって知ってるのかな。」と蜂に感心する姿も見られた。

◎山の造り方の不思議

せっせと山を作る蜂の様子を観察している子に「どうやって砂運んどる？」と聞いてみた。「なんか、あごに砂をはさんで運んどるよ。」「あ、足で積んだ砂崩しとる！！」とその様子を実演しながら教えてくれた。蜂は穴の中に入ると、小さな土を丸めてあごにはさみ、バックをしながら穴から出ると、山になるような位置に土の玉を置き、足で玉を崩している。子ども達もそれに気付き、「団子にしてあごにはさんでるよ！」「どうしたら団子が造れるのかな？」「ボンドみたいにくっつくものあるのかな。」等と興味津々な姿が見られた。「蜂って頭いー！！」「かっこいー！！」と感心していた。

◎蜂がクモを運んでいたよ！ふしぎ、ふしぎ

園庭の遊具の横に大きなクモが死んでおり、その周りを蜂が狙っているかのようにクルクルと歩いている。その様子を見ている子どもや、保育士に気付くと、こっちを睨むように大きく歩き出す蜂の姿が見られた。子ども達が「蜂さっきから何してるの？」と見ていると、今度は尻を揺らしだした。「あ、お尻こんなふうにしてるよ！！」と真似をする子もいる。10～15分ほどの間、クモのそばを離れなかったが、急にクモの頭をあごにはさむと、やはり後ろ向きにバックをしながらすごいスピードでクモをひきずっていく。子ども達は「あ！！」と驚き、ついて行きながら、夢中で見ていた。(①)一度蜂はクモを離し、飛んだが、子ども達の方へは来ず、園庭の隅をクルッとまわると戻ってきた。(②)そしてクモをあごにはさむとまたすごいスピードで園庭の隅に向かっていった。子どもたちは、またそっとついて行きながら、「どこまで行くの？」「速いね！！」と興味津々に見入っていた。蜂が遊具に止まり、またクモを落とすと「頑張れ！頑張れ！」と応援する声もきかれた。(③)「どこに連れて行くのかなぁ？」「あの穴の中に入れるんじゃない？」「じゃあ、あの穴って冷蔵庫みたいだね」等と話し合う姿が見られた。



今後の課題

園庭は、子どもたちが何回も探検してより詳しく観察することができ、共通理解ができる場所である。今回の活動は、偶然に起きた出来事だったが、「いつでも」「どこでも」「手軽」「楽しく分かる」素材をとりあげることが大切だと思う。今後も、観察する楽しさや、発見する喜びをみんなで共感し合いながら、小さな虫博士の育ちを願うとともに、次はどんな偶然に出会えるのか期待している。

ポイント

身近な園庭に、自然のダイナミズムがあるのですね。その一部始終を子どもたちがどんな表情で追っていたのでしょうか。偶然できた出来事に時間をかけて、子どもの食い入るような興味を満たし、また、なぜ同じ場所に巣があるのかを問題提起するなど、子どもたちの驚きや感動を受けとめ、好奇心、探究心を深めています。

A-3.「せみって目がキラキラしてるで」
常盤会短期大学付属泉丘幼稚園（大阪府堺市）　＜5歳児　夏＞

はじめに

本園の子どもたちは、木々や草花、色々な虫たちと触れ合うことで、季節をそのまま感じとることができる。夏はせみの声がそこら中の木から聞こえてくる。そんな中、園長から「お泊り保育で夜のお散歩に行きましょう。せみの幼虫をみつけに行かない？せみが成虫になるときを子どもたちに見せてあげたい」と提案があった。年長担任の2人とも、せみが成虫になるところは図鑑や写真で見たことはある、本物はみたことがなかったので興味津々であった。

事　例

1. せみの幼虫って夜にでてくるねんで

お泊りの話し合いで「お泊り保育でみんなどんなことしたい？」と聞いてみた。「花火。ゲーム。探検などなど」「お泊り保育でしかできないことないかなー」というと「夜の散歩やなー」という意見が出る。「じゃー夜しか見られないもの探しに行こうか。何が見つけられるかな？」というと、虫大好きのN児がすかさず「先生、むしみつけにいこ！」とのってきた。「夜に見つけられる虫ってなんだろう？」とかえすと今度はK児が「ぼくみつけたことあるで。せみの幼虫な、夜にでてくるねん。」というと、他児も「僕も知ってる。」「僕も。あのな、家に持って帰ったらだんだんせみになるねん」と言い出した。「先生見たことないから、見てみたいなー」と言うと「じゃーお泊りでみつけにいったらええやん。僕いてるとこ、教えたるわ」と言い、みんなでみつけに行くことに決まった。

2. そうっとそうっと、やで

お泊り保育まで、教師達も子どもたちがうまくせみを見つけられるように、せみの出てきそうな穴があいたところや、幼稚園の行き帰りに、下見をしていった。出勤途中で見つけてきた幼虫を職員室のカーテンにつけて、どのくらいで成虫になるのか時間を見たりもしたかったのだが、かわいそうにどの幼虫も途中で死んでしまい、結局、教師達は、お泊り保育までは成虫になったせみに出会うことはできなかった。お泊り当日では成功するように、せみを入れるものは、何かに引っかかったりしないものがよいのではと、透明のプラスチック容器にした。持ち帰ったせみは木に登っていくのと同じ条件になるよう、カーテンを移動できるハンガーにかけるよう準備をした。子どもたちにはせみの図鑑や絵本を置いたり、インターネットでせみの検索をし、脱皮の様子を写真で見せてくれるサイトをだし、部屋に張っておいた。せみに関する紙芝居を見たり、誕生会では園長がせみのおはなしを素話で聞かせてくれたりもした。

お泊り保育当日。いよいよ外が暗くなりだし、教師達の導入で子どもたちがせみ探しに行く。「いた！」子どもの声のほうにいくとせみのぬけがらを指している。「みんなみてＹ君が見つけたの。こんな風にの中に穴が開いているよ。この中からあがってくるから、こんな木のところさがしてごらん。」

そういうと子どもたちは同じ種類の木を探し出す。「どこかで、うごいているかもしれへん。歩いてるかもしれへんなー」しかし、せみの殻はたくさんみつかるものの、動いている幼虫はなかなか見つからない。教師も子どもも必死で探す中、「あっ、動いてる！」の子どもの一声で一斉にみんなが集まる。「ほんとだ、木に登っていってる」「そうっとよ。そうっとそうっと・・・」と容器に入れる。

「見つかったねー」「まだどこかにいてるかなー」といっていると、子どもたちの様子を見ていた散歩に来ていた地域の方が「ここにもおるよ」と知らせてくださる。「これで2匹や」2匹とも同じ大きな木（桜の木）に止まっていたことから、「大きな木にいてるみたいやから。大きな木探してみよ」「さっきいてたせみと、おんなじ木さがしにいこう」といって探す子どももいる。「いた！」さっきよりももっと大きな桜の木に止まっていた。合計3匹のせみが見つかる。容器を持っているのは、虫が大好きなN児。運ぶのも慎重でゆっくりと歩いている。「そうっとやで、そうっとあるかないと死んでしまう」それまで先頭をきって歩いていたN児であったが大事そうにもって、とうとう最後尾になってしまった。「このせみな、うまれたら、にがしたるねん」といっている姿がとてもうれしそうで、いい表情であった。

3. せみが大人になるのと、みんながねむるの、どっちがはやいかな？

幼稚園に持ち帰ったせみを用意したカーテンにつけると、せみがどんどんカーテンを登っていった。3匹とも無事に元気にあがっていく。そして子どもたちが布団に入った頃、せみも脱皮の準備をはじめた。1匹目の殻からせみがでてきて反ったようになっていたところをみることができた。子どもたちは目をまん丸にしてその姿を見ていた。「せみさんも明るいとこだと外に出られないからでんきをけすね」のことばで消灯する。まだまだ見たいなーという気持ちが顔に表れているものの、すぐに何人かは眠ってしまう。

眠れない子どもは、廊下においているせみを見に来る。じっとそばでその様子を見て「うごいてる」「こっちはまだかなー」「がんばれ、がんばれ」など3匹を比較しながらみつめて、布団に戻っていく。

入れ替わりながら眠れない子がせみの様子をのぞきにきては布団に戻り眠ってしまう。それを繰り返し、全部のせみが脱皮を始める頃には、もう全員がぐっすりと眠ってしまった。

4. せみどうなった？

子どもたちが全員起きる朝6時30分には、一匹目のクマゼミが、カーテンから離れ廊下を飛び出していった。「先生、窓開けてたら逃げてしまうやん」「いいやんか。せみはちょっとしか生きられへんねんで。好きな所に飛んでいったらいいねん」と言い合いになるが、「お友達みんなで見送ってあげようか」と教師が言うとみんなも賛成。「つかまったらあかんでー」子どもたちが全員無事に幼稚園にとまることが出来た日、3匹のせみたちも元気に飛び立っていった。

考　察

お泊り保育のひとつの計画で子どもたちとせみの幼虫を探してせみになる様子を見せたいという、教師の思いが、子どもたちの思いと重なって実現できた。暗がりでせみの幼虫を見つけ、持ち帰り、成虫になるまでを一緒にすごすという貴重な体験の中で、子どもたちはいろいろな発見をした。子どもたちの気づきや思いを考えていきたい。

- ◆ 幼虫がいる場所を探すうち、1匹目のせみと同じような木を探したり、穴や抜け殻などめあてを持って探すようになった。
- ◆ はじめは誰もが見たい触りたいという気持ちは一緒であるが、観察していくうちに触ってはいけないということを教師が何度も言わなくてもよくなり、なぜ触ってはいけないかをわかり子ども同士で注意しながら約束を守っていた。
- ◆ せみについてよく知っている子どものことばに耳を傾け、せみの生態に興味や関心を更に深めていった。
- ◆ せみの成長にかかわり、命の大切さに気づいていった。

まとめ

せみの成長を目のあたりにして、子どもたちが羽化するということに興味をもち、せみの成長が自分たちのお泊り保育に取り組むという思いと重なってより身近なものになった。教師も子どもたちと一緒に感動を体験することができた。生き物は、子どもたちを心落ちつかせたり、つかまえた喜びを与えてくれたりする。しかしその生態をよく知らずにむやみにつかまえてもすぐに死なせてしまうことが多い。実際今回のお泊り保育が終わり、預かり保育でせみとりに行ったが、どの子もつかまえたせみをすぐに逃がしてあげていた。こうした小さな命とのかかわりを繰り返していく中で、命の大切さを感じとってほしい。

ポイント

お泊り保育の夜の散歩。そこまでに至るまでに、保育者の思いと子どもの思いが重なりながら進んでいく様子がよくわかります。子どもにじっくりと観察する機会を与え、子どもの気づきや発見をキャッチし、興味へのきっかけとなるような遊びの環境を構成する教師の援助があり、子どもたちの感動体験に繋がっています。

A-4.「ジャガイモの収穫」
山鳩保育園（京都府八幡市）　＜5歳児・2月～6月＞

本園では毎年、色々な植物を栽培し、子ども達に見せ、収穫したものを食べ、関心を持たせようとしてきた。しかし、世話をするのは大人で、子ども達はただ見ているだけで、一緒に育て成長を楽しむ姿がほとんど見られなかった。だから子ども達は、花壇やプランターの中の土を何の迷いもなく掘って虫探しを喜んできた。どうしたらもっと植物に関心を持ち、子ども達も積極的に植物と関われるかを考える。

そこで今年は、土を作る段階から収穫に至るまですべて子ども達と共にし、収穫を喜び、命に気付けるような実践をしていきたいと考えた。

はじめてのジャガイモ作りに挑戦
―1個がいっぱいに増える不思議を体験―

想像画
こんな風にできたらいいのにな

2月28日　**土作り**をしよう（園の生ごみを肥料として再利用する）

☆「ふわふわの土のお布団になーれ」
☆「生ごみが肥料になるの！？」

自分の所はいつ芽が出るのかワクワクし、登降園時に目を向ける姿が見られる

3月4日　**植え付け**をしよう
（地植え7コ・プランター4コ・米袋12コ）
→米袋には種類と自分の名前も書く

☆「プスプス穴あけおもしろいね」

☆「これが種になるの」

☆「早く芽を出して！」

3月24日　**芽が出たよ！！**

☆「みんながいっぱい見に来てくれて嬉かったんかな」「私毎日早く出てきてってお話したよ」
「芽が一生懸命土の中から出ようとしているのを見ると、思わず土をどけて芽を出してあげてしまう子もいる」

5月7日　**虫が葉っぱを食べてしまう**

★「どうしたらいいのかなー?」
☆偽物をつくる　☆捕まえる　☆かくす
☆網を二重に巻く　☆袋をかぶせる

★「どうして食べてしまうの？」
☆「おいしいのかな」「きっとおなかがすいたんだ」」
「たくさんあるから少しくらいあげる」

話し合った結果、虫も生きているからそのままにしておいてあげることにする

芽が出たら自分以外の友達の所にも目を向け共感し合う姿が見られる

☆「こんなんかな？」

5月12日　花が咲いたよ

☆「紙芝居で花が咲いたらもうすぐできるってきいたよ」
☆「うすむらさきと黄色がきれいだね」

「こんな大きいジャガイモがいいのにな」

6月5日　ジャガイモ収穫

ジャガイモの根っこって「やきそばみたい」「ムカデみたい」「パパのおひげ」「パーマのかみのけだ」

「茎の先が膨らんでるよ」「あかちゃんのもあるね」

地植え	7コ	103コ
プランター	4コ	89コ
米袋	12コ	122コ

★「どうして植えた所によって大きさが違うの？」

☆「米袋よりも地植えのほうが小さいね」

↓

「地植えのほうは他にも色んな野菜がたくさん育っていて窮屈だったのかなー？」

できたジャガイモで大きさ比べ　仲間集めをしよう

「大きいのから小さいジャガイモを全部並べるとどれ位長くなるのかな？」

「このジャガイモは小さいから赤ちゃん組のちっちくみさんかなー。これは大きいから僕たちのクラスだね」
年齢（クラス）と対比

製作してみよう

観察画を描こう

親子クッキング

考　察

土を作る段階から子どもたちと共にしたことによって、栽培に対する興味、目の向け方が変わってきたことを実感できた。毎朝、観察しては保育士・友達に報告してくれることによって、いろんな角度からも見ることができたのではないかと思われる。また、植物だけでなく、虫にも命があることを学び、共に「共存している」ということも心の中に感じとってくれたのでは・・・と思われる。

ポイント

ジャガイモの栽培を土作りから始めて収穫するまで、子どもと保育者が共に汗を流し、命への気づきや収穫の喜びを体験して「科学する心を育てる」ことに取り組んでいます。視て、聴いて、触れて、いじって、匂いをかいで、感じて考える子どもに育つことを願って、日々、子どもと保育者が共に、野菜、果物の栽培に取り組んでいる様子が伺えます。

A-5.「ビオトープ作り」
もいわ幼稚園（北海道札幌市）　＜全園児＞

園庭にビオトープを作り、日頃から子どもたちが、自然を身近なものとして感じ、池の生き物を発見したり、観察したりして小さな生き物の様子を知り、そして、命についても感じとることができるようにする。

昨年度の幼児の発想を受けての池づくりから発展し、ビオトープを作ることになった。ビオトープを作るにあたっては、専門家を招いて研修会を行ったり、池作りの考え方を話し合ったりした。その結果、できる限り自然な形での池作りということで、業者と相談の上、植物が生えてくるように防水シートを敷かずに粘土で水留めをし、池を作ることにした。

＜鳥が来る池を作ろう！＞（5歳児）

年長児が園庭に鳥が来るようにと巣箱作りなどに取り組んでいた。幼児のその思いを受けて，鳥が水を飲みに来ることができるような池作りをしようと投げ掛けた。

知っている限りの知恵を出し合って池作りがスタートした。

「小鳥がゆっくり休める池を作ろう！」「穴を掘ろうよ！おっきいやつ！」「でも、穴に水を入れたら、水は地球の後ろまで染みてなくなるんだよ…」「そうだ！プールみたいにビニールシートを下に敷こう！」

穴を掘る姿は真剣。色が違う硬い石に当たると**「ここは地球の始まりで、池の底なんだ！」**と大発見。

土に水を掛け、**「土は水に弱いから、掘る時に水を掛けると柔らかくなるよ。泥団子作るときにそうしたからね。」**

穴が掘り終わり、シートを敷いて水を入れた。

「葉っぱ入れたら小鳥が餌と間違えてくるかもね！」

翌日から業者の工事が入った様子を見ながら、**「園長先生、池の博士呼んでくれたんだ！俺達の池、すごい池になるぞ！」「ペンギン来たらどうする？」**と、池の様子に興味をもっている姿が見られた。

＜池の水汲み＞（全園児）

池が完成したので、幼稚園の裏山（山の神様と呼んでいる）の雪溶け水（栄養の水）を入れることにした。雪溶け水から池までおよそ300メートル、バケツやペットボトルをそれぞれに持って水を運ぶことにした。

＊水を運びながらたくさんの会話が聞かれた。

- **「みんなで運んだらすぐにいっぱいになると思うでしょ。なかなか溜まらないのは、地球の後ろ側まで水が染みているんじゃないだろうね」**
- **「みんなで頑張ってるからもうすぐだね。今ごろ、鳥も楽しみにしてるね」**
- **透明ペットボトルの中の水を見て「何かいるよ！虫かな～？ごみかな～？」「神様の水だからかな？」「ちょっと黄色いよね。おしっこじゃない？」「神様のおしっこ～！」「先生、山の神様の栄養の水は汚いね。でも池に入れると（粘土が溶けるため）もっと汚い水になるよ。これってすごい栄養なんだね」**

＊ 何度も行き来するごとに、一緒に運ぶ仲間が加わったり、５歳児が3歳児をしっかりサポートしたりする姿が見られた。

＊ 3歳児は、水汲みは体力と興味の持続を考えて一往復だけと考えていたが、4・5歳児が繰り返し水汲みに出掛ける姿を見て、自分から何往復もする姿があった。**「働いてるね～」**と言いながら重さにめげず表情がとても生き生きしていた。普段の遊びとはちょっと違う活動であることを意識しつつ、幼児なりにこの活動が何か役立っていると感じ、そのことが心地よいものに感じられたのではないだろうか。

＜鳥の餌を撒こう！＞（5歳児）

教師　女児2名が池にパンをちぎって投げ入れているのを見て「なにしてるの？」

幼児　**「鳥が来るように、池にパンを撒いているの。」**池がパンだらけになる…。

教師　こんなにパンだらけになって、水が腐ってしまわないだろうか？と心配になったが、まだ池にかかわり始めたばかり。これから、池についていろいろ考えたりして、池の水の状態にも気付いていくだろうと思い、「そうか、鳥が来てくれるといいね。」と見守る。

その直後、二人は大きな塊を池に投げ込む。教師は思わず「あっ！」と声が出る。その声に驚き、幼児は教師の方を見る。

教師　状況を考えた末、「大きなパンをこのまま入れるのはどうかな？パン沈んでいくかも…。」

幼児　パンの様子を見て**「そうだねぇ。鳥食べられない。でも、もう取れないよ。」**

教師　木の棒でパンを手繰り寄せて取り、「どこか、大きなパンでも鳥が食べやすい所はないかな？」

幼児　**「あ！ ここ」**と言って、隣の木の枝にパンを置く。

＊ 教師にとっては、虫やカエルがきてくれないかなぁと願っての池作りだったが、5歳児にとっては、当初の思い通り「鳥を呼ぶ池」としての意義が強いようだ。鳥を呼ぶためにどうするのか、そこから池そのものの状態に気付き、いろいろなことを考えていくだろう。その経過を幼児とともに楽しんでいけたらと思った。

＜池にカエルを放そう＞（3歳児）

池の水汲み後、3歳児は自分から池を見に行く姿はなく、木の実を集めたり、畑の水やりを行う中で、池の様子を見て、**「温泉みたいだね」「みんなで水入れたもんね〜」**と興味をもっている姿が見られていた。さらに自分から池に興味をもてかかわることができるように飼育しているカエルを池に放すことができないかと考え、幼児に投げ掛けてみた。

教師　「オタマジャクシさん大きくなったね。カエルになったら、今までと同じご飯は食べないんだって。外に飛んでいる小さい虫さんを食べるんだけど、何かいい考えはない？」

幼児　**「虫さん捕まえてくればいいよ。チョウチョとか」**

教師　「でもカエルさんはすごく小さいから、チョウチョはたべられないと思うなあ」

幼児　**「じゃあ、川に逃がすか」**

教師　「川ってどこの川？」

幼児　**「幼稚園の川がいいんじゃない？」「幼稚園は、川じゃなくて池だよね」**

教師　「じゃあ、幼稚園の池に逃がしてみようか」

翌日から、オタマジャクシからカエルになったものを見つけては、池につれて行き、放すようになる。放しながら、池の様子を見て、小さな生物を発見したり、捕まえたりする姿が見られるようになる。

＜話し合いから＞

- 幼児と共に池の穴掘りや水汲みをしたことで、幼児の池に対する関心を高めていくことができたのではないか。
- 池の近くの餌台にある穴の開いたリンゴを見て、「僕たちが帰った後に鳥が来たんだね」と想像する幼児の姿があった。池があることで、空想の世界がより広がっていったのではないか。
- 3、4歳児は、オタマジャクシやカエルを放すなど、何か教師からの投げ掛けがあると興味をもつが、徐々に関心が薄れていく様子が見られる。教師が日頃から池の様子に関心をもって、幼児に伝えていくことで、幼児の興味が持続するのではないか。

ポイント

子どもの発想を大切にしてビオトープを作ることを通して、子どもたちの思い、また経験や情報をもとに予測して行動する姿が見えます。その後、ムカデ・カエル・ワラジムシ・ミミズ、またボウフラが発生してカになったり、フキ・アシ・ヨモギ・ウド・クローバー・ハコベなどの植物が自然発生的に生えてきています。子どもたちは、こうした小さな生物や植物の成長や命を身近なものとして感じ、好奇心、探求心を膨らませています。

A-6.「若葉の森探検」
会津若葉幼稚園（福島県会津若松市）　＜5歳児・4月～8月＞

「若葉の森」の自然を、子どもたちが、自分で見たり、触ったり、確かめたりして、面白さ、楽しさを感じる。
そして、こうした直接体験を通して、不思議さや驚き、感動をもち、興味関心を育て、認識や思考を深めていく。

当日のねらい

見て見て！僕達、すごいものみつけたんだよ！！

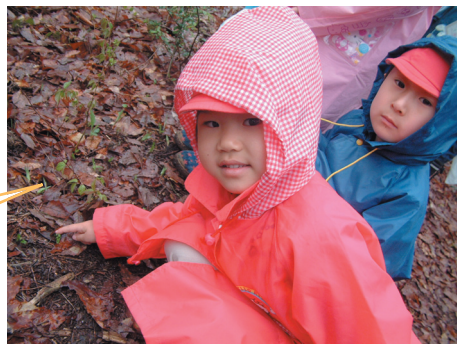
① 第一回若葉の森探検（4月）
周りの自然に目を向け、春探しをしながら興味を持って見たり触れたりする。

② 第二回若葉の森探検（5月）
周りの自然に目を向け、春を探しながら親子一緒に興味を持って見たり触れたりする。

③ 第三回若葉の森探検（6月）
前回気づいた事や不思議に思ったことがどのように変わったか探ってくる。

④ 第四回若葉の森探検～森の間伐～（8月）
・ 若葉幼稚園の森を探検し、夏探しを楽しむ。
・ 植樹したどんぐりを観察するとともに、間伐の様子、年輪などを見て樹木の成長に興味関心を持つ。

事　例

	幼児の様子	保育者のかかわり
3月	● 年中時後半に、年長クラスが作成した「若葉の森の地図」を見せてもらい、今までの探検で自分達が発見していないものがたくさんあることに気づく。	● 年長クラスの若葉の森での活動をまとめたものを直接聞くことで、来年度への期待・意欲を持たせる。
4月	**（第一回若葉の森探検）** ●「黄色バッチの時楽しかったんだよね！行きたい！」「前の緑バッチさんよりたくさん見つける！」と張り切っている。 ● あいにくの小雨だったが雨ならではの森の様子を楽しむ。	
	「蛙がいたぞ」「なめくじだ！」と小動物や「キラキラ光っている」と雨に濡れたクモの巣を発見しました。	
	● 保育者から晴れているときの森の様子を聞き、「この次はくさりの道や秘密の抜け道にも行きたい」と期待を持つ。	● 雨の日ならではの様子に気づかせながら、天気の良い日の様子なども知らせ、イメージが膨らむような言葉掛けをする。
	● 園に戻って「どんぐりなかった」と残念がる。	● 見つけたかったものが無かった事を残念がる子がいたため、どうしてなかったのか一緒に考え、沢山の気づきがあった子の話を全体で聞く機会を持ち、発見した喜びを共有できるようにした。
	（普段の保育にて） ● コンピューター・マイクロスコープ（顕微鏡・200倍）で園庭の葉や種を見る。「これもみてみたい！」とどんな風に見えるのか興味を示し、様々なものを見る。	● 顕微鏡で見ると、肉眼では見えないものが見え驚く子ども達に共感し、「これはどんな風に見えるんだろうね」「さっき見たものとなんか違うね」と、比べたりして更に興味が高まるよう促す。 ● 普段の保育の中でも、使いたい時に自由に虫めがねや図鑑が使えるよう設置した。
5月	**（親子遠足～第二回若葉の森探険～）** お母さん、こっちこっち！僕が連れて行ってあげるよ！ 	● 虫めがねや図鑑に加え、「若葉の森はどうなっているんだろうね」「この前はこんなものを見つけたんだよね」と前回の様子を振り返り、各自目的を持って探検ができるよう言葉掛けをした。
	● 虫めがねや図鑑、方位磁石を持って若葉の森を探検する。虫めがねで何かを見たいという気持ちが強まり、立ち止まっては虫やキノコなどを観察する。 ● 虫めがねを自由に使い、園庭の虫や花や葉などを見る。	● 方位磁石の色のついた針が同じ方向に向く事に気づけるよう説明の看板を設置した。

6月	**（第三回園外保育）** ●「この前見た、グニャグニャしたやつ見るんだ」と虫めがねを持って自由に幼稚園の森を探検する。 「うわぁ～！！アリの行列だ！ 若葉の森のアリは大きいね！！」 **（園に戻って）** 「とかげがいたよ」「水が流れる音が聞こえたよ」自分が見つけたものを先生や友達に知らせ、友達が何を見つけたか聞く。「一緒に見たんだよね」と大好きな友達と自由に歩け嬉しそうにしていた。 「暑かったね」 「でもお山の中は涼しかったよ」 「木がいっぱいだからお日様が入ってこれなかったのかな‥」 「お日様が入ってこないと木は大きくなんないんじゃない？」 「そうだよ、お日様当たらなかったら大きくならないもんね」 ●保育者から、森には草や木,花にお日様が当たるように時々木を切ってあげる事が必要だと話を聞く。 「じゃ、おれが切ってやるか」 「どうやって切るんだ？」	●不安に思っている子には、頻繁に声を掛け近くにいて、一緒に葉や虫の様子を見て安心感を与える。 ●園に戻ってから、どうだったか話し合う機会を持ち、自分だけでなく友達の話に耳を傾けてお互いが認め合えるようにし、自信と意欲を持たせた。 ●子ども達の気づきに共感し、どうしたら良いか一緒に考えた。 ●子ども達の気持ちを受け止めながら、山には、間伐が必要であることを知らせる。
8月	**（第四回園外保育～森の間伐～）** ●若葉の森で、虫や鳥の声を聞いたり葉っぱの色や気温などから夏を感じる。 ●間伐の様子を見る。 「切るなら全部切っちゃえば？」 「切っちゃうなんてかわいそうだね」 木がたおれそう！！ 葉っぱがゆらゆら落ちてきたよ！	●切った木の切り口に興味を持ち年輪から木の歳が分かることや、お日様が当たった所は幅が広いことに気づけるようにする。 ●間伐の様子を見てそれぞれが感じたことを受け止める。

まとめ

- 目的を持って探険が楽しめるよう、前年度の探検絵地図を見たり、探険に必要だと考えた用具を追加した。
- 目的の場所へ行こうとコースをはずれても挑戦する姿があった。
- 虫眼鏡や図鑑で虫や葉、キノコをじっくり観察･比較したり、虫や小鳥の鳴き声を聞いたり、季節探しを楽しんだ。
- 夏に間伐の様子を見た後、切り株に触って水分や温度を感じ、年輪に気付いていた。

反省・評価・考察

- 3･4歳時の森での経験を経て、5歳になり『見る』『気づく』ことに広がりが出てきた。
- 若葉の森を通して得た感動を色々な方法で表現することは、想像から創造へと育つ上で大切なことである。
- 具体的な目的意識を持って探険･観察ができるように工夫し、立体地図作りや間伐を試み、新たな反応が見られた。
- 子どもの姿、興味好奇心の表れ、反応などを記録に取り､検討･評価を繰り返す中で、教師の柔軟な配慮､援助の重要性を感じた。

ポイント

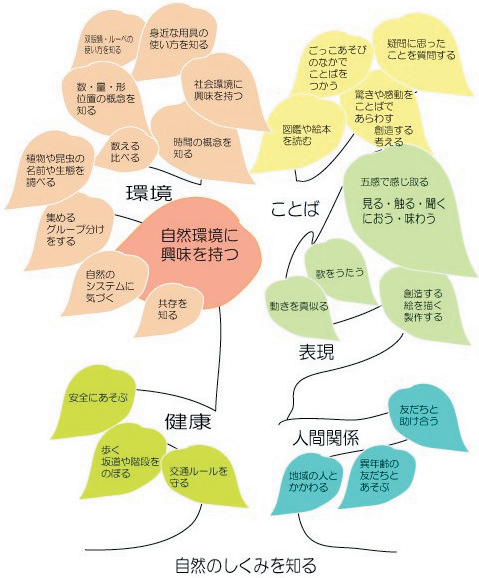
園が所有する森を活動の場に、3年間の見通しの中で保育計画を作り、毎年、子どもたちがより深く自然と関わるよういろいろな工夫が考えられています。子どもたちが、自分で見たり、触ったり、五感にふれる直接体験を通して､「面白さ」「楽しさ」を感じ、興味･関心をもち、そして、新しい気づきや考え、思いをふくらませています。

A-7.「平和台探検隊」
よいこのもり保育園（宮崎県宮崎市）　＜5歳児　7月～2月＞

自然に親しむ保育

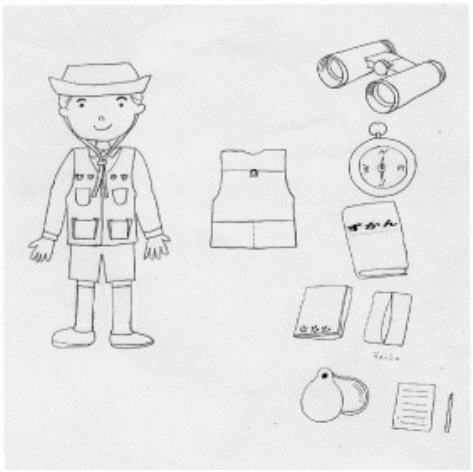
どっぷりと自然に親しみ、自然の中で見たり、感じたり、考えたりする体験をして、動物や鳥、昆虫、植物など生物との共存の仕組みを知り、生命の不思議さや畏敬の思いを育てたい。

平和台探検隊の考え方



平和台探検隊の服装

探検隊用のポケットのたくさんついたベストと帽子をかぶります。ポケットには、コンパスやルーペ、ミニ図鑑を入れ、双眼鏡を持ち本格的な探検隊スタイルです。



万歩計一日歩数

事　例

【木は生きている】7月

平和台の自然に親しむうちに、「この虫はこの木が好き」ということを知ったり、図鑑を開いて葉っぱや実の形から木の種類を見分けたり、名前を覚えたりしています。平和台公園では上を見上げて、枝がいっぱい繁っていることに驚いたり、風で木々がざわめいている音に耳を澄ませて聞き入っていることもあります。ルーペを使って「葉っぱには細い葉脈がたくさんある」ことも発見しました。子どもたちの関心は、今、木の内部に移っています。切り株を見て年輪を数えたり、中が空洞になっている枯れ木を見て『木の中には何が入っているのかな？』と不思議がっています。そこで、聴診器を持っていき、木に当ててみました。『ドクンドクンって聞こえたよ』『トクトクといってたね』など、感じ方がひとりひとり違います。自分たちの心臓の音が聞こえるように、木の中に何かがあると感じ取ったようです。園に帰ってからも木について詳しく調べてみました。根から水を吸っていること、中には水や栄養の通る管があることなどを知りました。『じゃあ、あの音は木が水を吸っている音だったのかな』と、自分たちの発見に喜んでいます。ほかにも、自分たちと同じように息をし、また空気をきれいにしていることも知りました。『もし、木がなくなってしまったら、どうしよう』『虫の家がなくなる』『空気が汚くなるよ』『あそべなくなる』など、子どもたちで話しています。「木が生きている」こと、木は他の生物にとっても大切なものだと感じ始めています。

【ヤマミミズ発見に大興奮】9月

『見て！へびかな？』『ミミズに似てるよ』子どもたちが興奮して山の斜面をのぞいています。体長約25 cmのヤマミミズです。この大きさのミミズを初めて見た子どもたちは、土の中からでてきたことや、どちらが顔でどちらがお尻か判らないということをしきりに話しています。どうしてこんなに大きくなったのかを口々尋ねます。みんなで調べてミミズは、土の中の枯葉や食べる糞をし、土に栄養を与えるということが分かりました。これから土の中にもいっそう興味を示すことでしょう。

【森のおべんとう】11月

森には木の実や落ち葉がいっぱいです。それを使って「動物の弁当」作りをしてあそびました。『ドングリを食べるのはリスだよ』『ミミズの食べ物は落ち葉だよね』と話しながら並べていきます。

探検を重ねるごとに、子どもたちが土の中には小さな虫がたくさんいること、落ち葉が土の栄養になること、鳥たちが木の実を食べて出す糞から種が出て植物が芽吹くことにも関心を示しはじめました。「何を食べて生きているのか」に興味を持ったようです。これを機会に、食物連鎖や、自然の循環にも少しずつ目を向け、自然のしくみのおもしろさを感じ取ってほしいと思います。

【森は、おもしろい！】2月

平和台広場のセンダンの木にとまって実をついばむアオゲラを双眼鏡で興味深く見ていました。図鑑で調べると同じ鳥の中でも木の実を食べる鳥、小動物を食べる鳥などにわかれていることが分かりました。そこで、鳥の巣箱を作り、平和台の森にパン、バナナ、みかんなどを置くことにしました。『きっと、パンを食べるよ』『バナナも食べるかな？』とそれぞれに予測を立て友だちと話しています。数日後、巣箱を見に行くと『みかんがなくなってるよ！』と、子どもたちは驚いた表情でした。『果物を食べるのはヒヨドリだよ』『メジロやハシボソカラスも食べるんだって』と、探検の後も図鑑で調べるなど予想以上に子どもたちは鳥への関心が高まっています。

まとめ

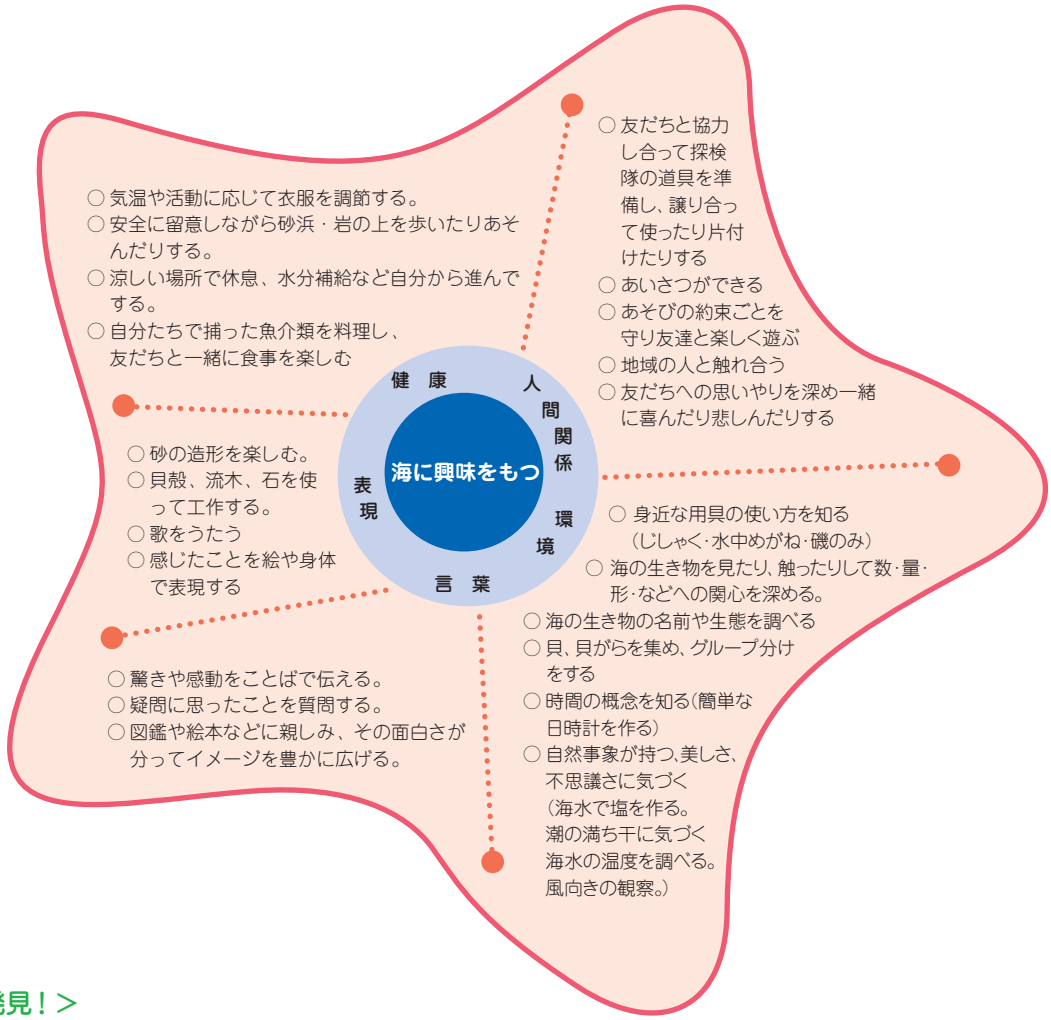
子どもたちにとって平和台探検隊は、発見が驚きの連続です。これまでに子どもたちは、樹木や草花、昆虫、小動物を、見て、触れて、鳥や虫の鳴き声、風に揺れる葉の音、花の匂いなどを全身で感じ、その感動を友達と分かちあってきました。そして自然をより身近に感じ、おもしろさや不思議さを味わうことができたと思います。また、少しずつですが、「どうしてこうなってるの？」「なぜ？」と自然の循環や環境問題にも目を向けて尋ねるようになりました。探検は、子どもたちに偉大な自然の中での小さな人間の存在を感覚的に感じ取らせたと思います。

ポイント

子どもたちは、園から3キロの道のりを歩いて平和台公園に行き、広大な公園を走り回って探検をします。日常の保育の中で体力作りの取り組みが行われていて探検もダイナミックです。そんなよく動き回る子どもたちが、木に聴診器をあてて、木の音を聞く静の姿も心に響きました。自然の不思議さを子どもたちが自分の身体全体で体験し感じています。

A-8.「さくら探検隊」
南さくら保育園（宮崎県串間市）　＜5歳児＞

『海』をテーマにした年間計画を立て、子どもたちがこの雄大な自然の不思議さや美しさに驚き、感動する心、「なぜ？どうして？」と不思議に思い、考える心、また『生きる力を育てる』ために自分で考え行動する力をつけてもらいたい。



＜ウニ発見！＞

「先生ウニがいるよ！」と、潮だまりにたくさん『ムラサキウニ』を発見しました。手でつかんでも、刺されることなく安心です。しかし、『ムラサキウニ』よりも、トゲの長いウニを発見。図鑑で調べると、『ガンガゼ』という名前で、毒があり危険と書いてありました。海の生き物を、今までは何のためらいもなく触っていた子ども達でしたが、毒があり、危険な生き物もいる、ということを学びました。

「うわぁ、このウニには目があるね。」と、『ガンガゼ』の身体の真ん中に目を発見しました。また、よく観察すると、ウニにはトゲのほかに、軟らかい足があることにも気付きました。『ガンガゼ』の発見から、たくさんの気付きに結びつきました。『ムラサキウニ』は食べる事ができるんだよと教えてもらい、早速、磯のみで割り味見をしました。『海水で洗って食べるんだって。』と一度食べた子どもは、自分で潮だまりから『ムラサキウニ』を獲ってきては試食しています。遊びの中で自然と、食べられる生き物と、そうでない生き物を覚えています。

＜潮だまりに潜む様々な生き物たち＞

子ども達が海にきて、一番始めに探す生き物は『カメノテ』です。岩の間にはまり込んでいて、手ではなかなか獲ることができません。そのため子ども達は磯のみという道具を使うことになります。初めて手にしたときはどのように使うのか想像もつかず、ただ『カメノテ』を上から擦るように使っていました。しかし、回数を重ねるごとに、岩と

『カメノテ』の間に磯のみをはさみ込み、テコの原理のように使うことを自分たちで考え、うまく獲れるようになりました。

できないことも、自分でどうすればいいのか考え、実際に試してみます。それを繰り返す事によって、自分自身で身につけていきます。人から教えられた事よりも自分で覚えていく事が、より生きる力に繋がっていくと感じられます。『カメノテ』を見つけると、子ども達の興味は潮だまりの中へと移ります。ボールや、バケツを片手に、『ヤドカリ』や『ニセクロナマコ』、『ムラサキクルマナマコ』を捕まえています。「ナマコってぶよぶよしてるよ」「お腹をおすと、おしっこするよ！」と実際に生き物を触って観察しています。波打ち際に『ギンカクラゲ』がたくさん浮いているのも発見し、観察しました。「こんなクラゲはじめて見るよ」と半信半疑でしたが、図鑑でこのクラゲをみつけると、「ホントにいたね」と、新しい生き物にも興味を示していました。

＜台風翌日の様子＞

（台風前）

（台風後）

「見て先生！岩の色が違うよ！」台風のあと、弓田浜を見に行くと、いつも見なかった岩があることに気付き、驚きました。「この岩はどうしてでてきたの？」子ども達は潮だまりや新しくでてきた岩を観察しています。前日の台風の様子を思い出し、この岩はもしかして、大波に運ばれてきたんじゃない？」「風が強かったから、岩の上にあった砂が吹き飛ばされたんじゃない？」と自分の思ったことを口に出し、話し合っています。台風という自然現象で、環境が一変することを自分の目で見、より自分たちを取り囲む環境について興味をもってきました。

＜遊んだあとは＞

自分たちで使った道具（タライ、バケツ、シート等）は、皆で力を合わせて運びます。「疲れた～」と言いながらも、「これ重たいから二人で持とう！」と、人に任せるのではなく、自然に手を差し伸べる姿が見られるようになってきました。自分が大変な思いを体験することで、相手のことを想う気持ちが少しづつ芽生えてきました。

考　察

海が近いにもかかわらず、ほとんど磯遊びをしたことがない子どもたち。まずは海を知ることから始めました。生き物、波の様子。好奇心いっぱいの子どもたちは、新しい物を見つけると、抵抗なく触れて観察します。探検を重ねるごとに、疑問に思ったことを調べたり、不思議に感じたことをどのように解決するか自然と身につけ、自分で考え行動するようになりました。そして友達にも教えていく姿が見られました。砂浜を歩くことや、岩山をよじ登ることを通して、自分の身体を最大限に活かすことも体験できました。子どもたちの発見に一つ一つ共感しながら、一緒に疑問を解決することで、新しい発見に繋がる、その喜びをこれからも子どもたちと一緒に感じ体験していきたいと思っています。

ポイント

園バスで5分位のところにある海。近くにある自然環境は、時としてあまりにも当たり前で見過ごしてしまいがちです。海に関わる実践は、どんなにか自然界の不思議さを子どもに感じさせることでしょうか。自分達で考え行動するという子どもたちの姿が見えてきます。

B. 遊びの中に「科学する心」がある

B-1.「蒲鉾板で遊ぼう」
八幡東幼稚園（福岡県北九州市）　＜4歳児・7月中旬～下旬＞

7月に入って水遊びが活発になると、シャボン玉やシャワー遊び、舟作りなどを喜んでし始めた。そのために、ヤクルト容器やペットボトル、発砲スチロール皿など身近な素材を準備して提示した。

そのときに舟作りに使うかもしれないと準備した蒲鉾板20枚ほどで、幼児がおもしろい遊びを始めた。蒲鉾板を並べたり、積んだりして遊んでいる様子から、ブロックや積み木とは違う構成遊びをしていることに気付いた。

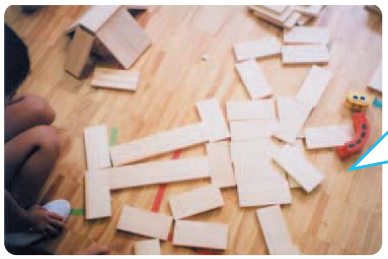
そこで、幼児の科学する心を育てるよい自然素材だと考え、同じ形、厚さ、重さの蒲鉾板をたくさん準備した。それを見た幼児がイメージを広げながら遊びを発展させていった事例である。

実　践

幼児の活動　／　幼児の姿（行動、表情、言葉）　／　教師の読み取りと援助

蒲鉾板を並べて遊んでいるうちにロボットのイメージが沸いてきて、自分のイメージを具体的に表現して満足している。本児の思いに寄り添って共感しよう。

蒲鉾板でロボットを作る。



「先生見て！
ロボットができたよ。
すごいでしょ。」
考える　満足感

蒲鉾板を打ち合わせて音を出して遊ぶ。

「火の用心！
カチャ、カチャ、
カチャ！」
感じる、気付き

蒲鉾板に出会ったとき、2枚を打ち合わせて音を楽しんでいる。出た音が心地好く本児に響いて、満足感を味わっているのだろう。

遊んでいる姿から、**「気付いたり、考えたりする」という科学する心の育ちが見られた。**そこで、遊びをもっとダイナミックにできるように、イメージの広がりを求めて、多量の蒲鉾板を準備し、意図的に提示した。

迷路を作って遊ぶ。

多量の蒲鉾板に出会って歓声をあげた幼児たちは、それぞれ持てるだけの蒲鉾板を持って広い場所へ移動する。

あちこちで一人ずつの迷路作りが始まり、やがて友達とつながり、2～3人の遊びと変化していく。作りたいイメージをそれぞれが出して試していくことを楽しんでいる。何度でも気軽に作り替えられ、その度に形が変化するので幼児の興味を引きつけているのだろう。

一人で迷路を作って遊ぶ。

「僕の迷路、
ギザギザ迷路よ。
まだまだ続くよ。」
考える　夢中　試す

2～3人の友達と一緒に迷路を作って遊ぶ。

「Mくん、こっちに曲がっていい？」
「いいよ。ぼくこっち側にいくから。」「いいね。違う道にして、後で合体しようね。」「OK！」
考える　感じる　アイデア　めあて　試す

並べていく活動から、積み上げていく活動へ変化し始めている。蒲鉾板を縦に積んだり横に積んだりして、自分のイメージにあったものになるように構成しているのだろう。

繰り返し遊ぶ中で、平面的な構成から立体的な構成へ変化している場面や幼児のアイデア、めあてを認め、満足感を味わせていこう。

家を作る。

真剣な瞳、蒲鉾板を
そっと丁寧に積んでいく。
夢中　めあて　挑戦　工夫

高く積んで遊ぶ。

「Kくん、
こうした方が倒れないよ。」
「そうかな？
三角ばっかり（三角形に積んでいく）
の方がいいんじゃない。
そうしたら、すぐに倒れたよ。」
「そうかな？やってみよう。」
意欲　考える　試す　めあて

「先生見て！すごく高いでしょ。
Kくんと二人で力を合わせたよ。」
「そうよ、写真撮って！」
「これ、タワーなんだよ。中から見れる
ようになってるんだよ。
すごいでしょ。」
アイデア　協力　挑戦　満足感

「Fくん、今度は僕の番だよ。」
「そっと積んでね。」
「そうとう高くなったよ。」
「わぁ、ドキドキする。」「届かなくなったら、
積み木持ってこようね。」
「絶対、先生より高く積もうね。」
「うん、頑張ろうね。」
好奇心　試す　挑戦　めあて

高く積むというめあてに向かって4歳児のこの時期でも協力して作っていく姿が見られる。
もっと高くと積んでいると音を立てて崩れ落ちる。がっかりするどころかその音も心地良く感じている。何度でも挑戦する姿を認め、心が動いている様子に共感して意欲を高めよう。

考　察

- この活動以前には、いろいろな自然素材に対して教師のもっているイメージを幼児に押し付けていたのではと反省した。素材の特性を掴んでおくことが大切であるが、どう使うのかについては、先入観を持たずに提示していく自由さをもたないといけないと感じた。
- 材料の質や量で遊びが変化したり、発展したりすることがこの活動を通して良く分かった。教師が繰り返しかかわっていけるような十分な時間を保障し、幼児の思いに寄り添うような援助を行いながら、満足感が味わえるような言葉かけをしていくことが大切だということを痛感した。
- 「気づいたり、考えたりする心」「“めあて”に向かって考え続ける心」「アイデアを出し工夫する心」など幼児の科学する心が育っていることが良く分かった。日々遊んでいる幼児の姿の中から、幼児の興味や関心を捉え環境を準備していくと、幼児は心を動かし、脳を動かして、自分から遊び込んでいくことが分かった。

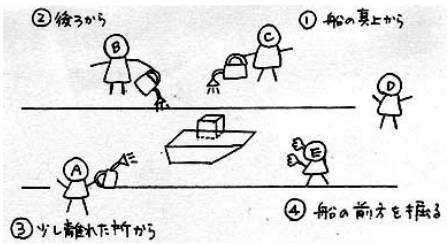
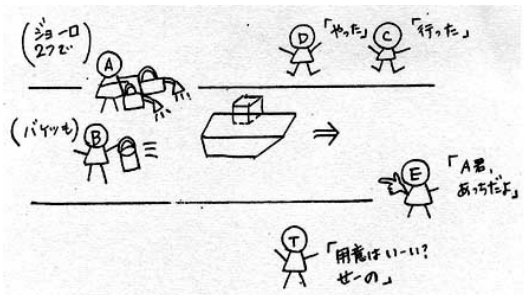
ポイント

活動の中で、保育者は「蒲鉾板」という素材に対して大人が持っているイメージを押し付けず、子どもたちが自由に遊びを展開する様子を、時間をかけて見守っています。子どもたちの興味や関心を捉えた保育者の適切な援助や環境の準備によって、こどもたちが自ら工夫し、挑戦するなど、遊びを深めていく様子がわかります。

B-2.「あっ、ここ船が通るじゃん！」
富士松南幼稚園（愛知県刈谷市）　＜4歳児・5月＞

〈幼児の様子〉

A児とB児が、砂場で海を作っている。そこへ、C児・D児・E児が来て、D児が「あっここ、船が通るじゃん」と近くにあった船をB児の掘っている所に置いたことで、5人は船を動かそうという思いをもった。

幼児の様子と教師のかかわり	幼児の姿から思うこと
C児がジョーロの水を船の真上から掛ける。 その様子を見て、B児「動かんね」と言い、船の後方に水を掛ける。 その様子を見て、A児も「ジョーロ、もってこよ」と水を汲みに行き、自分の掘っていた角から水を流す。 1人が水を流すのを見てから、次の幼児が流す、という具合に順番に流す。みんなが水を流す中、E児が船の前方を掘る。すると、水が流れ込みその勢いで船が少し動く。	 他児がしていることをとても興味深く見ている。一人ずつ順番にやるのは、前の子がやったのを見て、自分はどうしようと考えているからだろう。
動いたのを見たA児が「あっ動いた」と少し興奮して言う。 教師も「本当だ、動いた」と船に近づいく。 A児・B児・C児はじっと見ている。D児はE児の横に行き、E児と同じように掘り出す。 船は掘ると少し動くが、その場でゆらゆらしているだけで前には進まない。	今まで動かなかった船が動いたのを見て、期待感が高まってきたようだ。 D児はE児が掘って動いたから、同じことをしたら動くと思ったようだ。
教師はバケツやジョーロを幼児の近くにたくさん置く。 A児がジョーロを2つ持つ。 教師「A君、今度2つで流すの？行くかな」	いろいろと試せるようにバケツやジョーロをたくさん置いておこう。 A児はジョーロの数を増やしたら船が進むと考えたようである。
A児が船の側面の両側から水を流すが、進まない。E児はそれを見て「A君、違う。あっちから」と船の後方を指差す。 A児はよく分からない様子。 教師はE児の言っていることがA児に伝わるように「どこ？」とE児に聞き「A君の掘った所だって」と伝える。 A児が場所を変わると、B児もバケツを持ってA児の隣に立つ。	E児は流す方向に気が付いて「船の両側からでなく後ろから流さないと動かない」ことを教えているんだな。 A児はE児の言うことを受け入れようとしているが、理解できないようなので、A児に分かるいい方をしよう。 B児はE児の言うことをよく聞いていたようである。そして、バケツの方がたくさん入るから勢いよく流れると思ったのかな。
教師「A君、B君、用意はいい？せーの」 A児とB児は一斉に水を流す。 A児とB児はじっと船を見ている。 水の勢いで船がゴールまで流れる。 C児・D児・E児は「やった」「行った」と大喜び。教師が「やったね」と声をかけると、二人とも嬉しくてにやにやする。 二人は「もう一回やろう」「水もってこよ」「ここからスタートだよ」と、言いながらバケツで流す、船の後方から、横から真上から流す、スタートに戻してから流すなどいろんな流し方をする。 A児は船の真上から「だめなんだよなー」と楽しそうに水を流す。それを見て、B児も「だめなんだよねー」と言う。	 今まで自分がしたことだけでなく、他児がしたことも、いろいろ試そうとしていることが分かる。

ポイント

遊びの中で、子どもたちが他の友達をよく観察してそこからヒントを得たり、だめな方法を試してみたりして、自分なりに考えていく力を身につけていく様子がわかります。保育者が子どもの思いに共感したり、適切な材料を提供したりすることによって、子どもたちの探究心が深まり、さらに遊びが展開されていきます。

B-3.「こうやると おもしろそう！」
宇都宮大学教育学部附属幼稚園（栃木県宇都宮市）　＜4歳児＞

この事例を取り上げるにあたって

「気付き」や「新発見」が遊びのスタートとなり、「試し」によって、遊びは更におもしろく展開していくわけだが、最初の頃は、「試し」が自分だけのものとして終わってしまうことも多い。自分だけは繰り返し楽しんでいるが、なかなか周囲にその楽しさや発見が伝わらない。しかし、4歳児のこの時期、失敗による「新発見」が遊びを転換していく大きな要因となっている。友達のしていることの中からも、多くの「気付き」があり、それを自分の遊びとして広げるきっかけとしている。

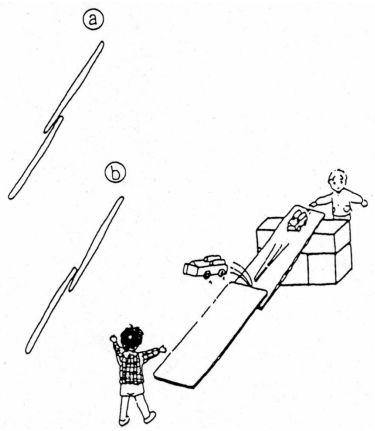
この時期、毎日のように飽きずに続く、ミニ四駆のコース作りの場面から、遊びの転換のきっかけやイメージの持ち方、イメージの広がり方など科学する心を支える環境の要因について考えた。

事　例　①

◎偶然の出来事から発想を広げて

M男は積み木の坂を長くつないで坂道を作ろうとする。板の重ねあわせ方によっては車の走り方が異なる。一段目は偶然(a)のように板をつないだので車はスムーズに走るが、二段目は(b)のようにつないだので、車はつなぎ目で横にジャンプする。ジャンプしたことがきっかけで、「車がどうジャンプするか」が友達の中での関心事となる。

H男は、車のジャンプの仕方を予想して、車が落ちたところからコースを作り足そうとしている。車のスピードや向きによって、ジャンプした後の落ちる位置が異なるのである。何台もの動きをよく観察することによって、落ちる位置の予想がだんだんあたるようになる。



考　察　①

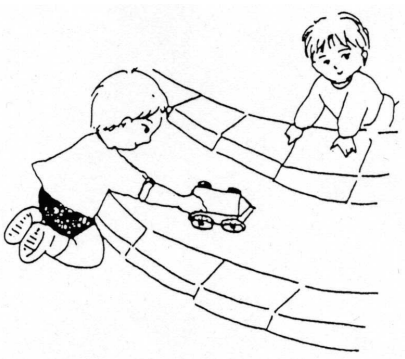
車が落ちてしまったことを失敗と捉えるのではなく、驚きや発見をもって捉えることのできるM男の感性はすばらしい。その感動の体験が探究心など科学する心に向かうエネルギーとなっていることを感じる。

事　例　②

◎ 友達との偶然の出会いからアイディアを取り入れて
～どうしたら　カーブする車ができるかな～

Y男は「車をカーブさせたい」という思いから、カーブをつけてスタートさせる。車の軌道にそっと積み木を並べ、道路を作る。うまくその道路に沿ってカーブする時もあるが、道路の壁となっている積み木にぶつかってしまう事もある。

そこへ偶然、右左に大きさの異なるタイヤをつけたD男が車を走らせる。D男の車はいつも同じ様にカーブする。Y男もタイヤの大きさを変えてみる。H男やM男等もカーブする車作りに夢中になる。



考　察　②

Y男が目的をもって取り組んだことで、周囲の環境に関心を寄せてかかわることができ、結果として周囲の環境が生きたものとなった。周囲で遊んでいる友達の思いや工夫が科学する心を起こす大きな環境となっている。

ポイント

子どもたちが「偶然の出来事」や「偶然の出会い」からたくさんの驚きや不思議を感じとり、試行錯誤を通して喜びや達成感を味わっていく様子が伺えます。保育者がそのような心を受け止めて関わっていることが、子どもたちの育ちの大きな支えになっていると感じました。

C. 人や地域とのかかわりの中に「科学する心」がある

C-1.「ホタルってすごいな」
高島幼稚園（岡山県岡山市）　＜全園児・2003年5月～2004年6月＞

地域の様子

高島学区は、ホタルの里としても有名で、地域の方が協力して繁殖、保護している。そのため、幼稚園周辺の用水路や川では、毎年たくさんのホタルを見ることができる。また、毎年地域の公園で「ホタル祭り」も開かれ、ホタルの観察をしたり、詳しく学んだりできる環境にある。

ホタルにかかわる活動への願い

こうした地域の特色を生かし、幼児と保護者が一緒にホタルを探す中で、見つけた時の「喜び」や「驚き」、幻想的な光景に出会う「感動」、光っていることへの「疑問」など、様々な感情を共有するきっかけにしてほしいと考えている。また、ホタルを探したり、貴重な存在であることを知ったりする中で、生き物を大切にしようという気持ちが育ってほしいとも考えている。

活動の展開

幼児からの活動　教師からの投げかけ　教師の思い・援助・読み取り

ほたるを見つけたよ！
5月

・ある幼児が「お父さんとホタルを見つけた」と幼稚園に持ってきたことをきっかけに、自分の経験をそれぞれに伝えようとする。
・「おしりが光ってるよ」「何を食べるの？」
・「どきどきするけど、かわいいね」
・「ホタルってどうして光るの？電池が入ってるの？」
・保護者からも家庭での様子を聞くことができた。ホタルを見つけて持ち帰った夜、「お母さんやお友達のところへ返してあげよう」と母親に言われ、泣きながらさよならをする。すると、一度飛んですぐに手に止まったのを見て「ありがとうって来てくれたよ」と言ったそうである。

・幼児の発見した喜びにその場で共感して終わりにするのではなく、この地域のならではの感動した経験を友達同士で共有できるようにしたい、発見した喜びやホタルを探す楽しさから、ホタルに対してもっと興味をもってほしいと考え、みんなで見つけた場所や数などを「観察マップ」に記入することを教師から提案する。

みんなで
たくさん見つけたので、
観察マップを作ってみよう！
6月

・観察マップには、シールを貼って日付を記入し、生息場所や数が分かるようにする。
・「ホタルの里にたくさんいたよ」「幼稚園の近くの小さい川にもいたよ」と探した場所を記していく。
・「おとといはたくさんいたけど、昨日はいなかったよ。どうして？」天候や気温によって違いのあることに疑問をもつ幼児もいる。
・「ここはたくさんホタルがいるね」「どうしてここにはいないの？」とシールの数をみて幼児なりに気づいている。

・ホタルをいろいろな場所で探すことで、見つけた喜びを感じながら自分たちの住む地域を身近に感じている。
・マップに記入することで、ホタルの住む場所や数を視覚で確認できるため、幼児なりに疑問を捉えて考えやすいようだ。

ホタルになって光るんだ！

・「ホタルになって光っているよ」と遊んでいる幼児が見られる。
・お面の材料を準備したり、「先生、ホタルは夜に光るから暗くして」との言葉から、保育室を暗くして雰囲気を出したりすることで、なりきって遊ぶことができ、「ホタルのおうち」を作ったり、劇ごっこをしたりするなど、よりごっこ遊びが広がる。

・観察マップに記入したり、友達と話し合ったりする中で、次第にホタルへの思いが強くなっていったようだ。
・ごっこ遊びをしながら、自分が経験したり感じたりしたことをしっかりと表現している。
・幼児の思いにそって、柔軟に環境を構成していくことも大切である。

ホタルの絵本「ほたるホテル」を読んでイメージを膨らまそう。

・ホタルが光る場面では「わー、きれい！どうして、ホタルは光るの？」と疑問をもつ。また、ホタルが光を灯し虫たちが眠る場面では「ホタルってどこでどうやって寝るの？」といった質問が出てくる。
・ホタルの繁殖にかかわっている地域のお年寄りに、詳しい話が聞けるようにお願いする。えさは何を食べるのか、どのくらい生きているのか、どうして光るのかといった質問に対して「えさはカワニナで、水がきれいなところに住んでいるんだよ」「光るのはおよめさんを探すためなんだよ」「生まれて10日くらいしか生きられないんだよ」と詳しく知ることができた。

地域のホタル博士に話を聞いてみよう！

・絵本からはごっこ遊びにつながるイメージが広がっただけでなく、それぞれの場面でホタルの具体的な生活の様子を知ることができ、さらに疑問がわいてきたようだ。
・自分たちが見たり感じたりした疑問の答えを、地域のお年寄りに聞いてみることで、地域の人とかかわりながら学んでいくことができた。

ホタルみたいに光りながら飛びたいな

・「ホタルってすごいなあ。ホタルみたいに光りながら飛んでみたいな」「ホタルの背中に乗ってみたい！」「体が小さくなって一緒に遊びたい！」と話し合いの中で思いが強くなっていく。

・いろいろな知識を知っていくうちに、ホタルを見つける喜びや不思議に思ったりすることから、自分をホタルと等身大に置き換えて「自分がホタルと友達だったらどうやってかかわるか」とイメージを膨らませるようになった。

ホタルの紙芝居を作ろう！

・幼児のイメージを形にするため、教師から紙芝居作りを提案する。
・T「最初はどこでホタルを見つけようか？」C「ホタルは水が好きだから、川の側がいい」
・T「ホタルさんとどんなことがしたい？」C「ホタルさんと一緒に遊びたいな」「小さくなってホタルさんに会いたい」「こわいカマキリも出てきたらいい」といった会話が進む。
・「Aちゃん、作るのが得意だからホタルの作り方を教えてくれる？」教師の誘いにA児が応え、「いろんな色の紙がいるよ」とA児を中心に、切ったり貼ったりしながら製作する。

紙芝居「ホタルさんとえいじくんのぼうけん」をみんなに見せてあげたい 7月

・教師とのやり取りの中で、次々に幼児なりの思いがでてくる。これまでのホタルを見た経験やごっこ遊びでの経験、ホタル博士に聞いたことなどの積み重ねが、幼児の思いに表れているようだ。

・「年中組さんや年少組さんにも見せてあげようよ」と自分たちが作った紙芝居に招待して見せてあげる。
・保護者にも見せ、「ホタル祭りなどで他の人にも見せてあげるといいね」という反応があった。

ホタル祭りで紙芝居を見てもらおう（翌年6月）

翌年、
・翌年の年長児がカセットにセリフを吹き込んだ。画面は当日スクリーンにパソコンから映し出され、ホタル祭りで披露することとなった。
・「あっ、みんなで作ったホタルの紙芝居だ！」「おもしろいね」といった感想が小学校1年生や地域の人から聞かれた。

考　察

・園外での経験がきっかけとなり、この地域でしかできない自然環境を生かした活動につなげていくことができた。観察マップでは、自分の足で歩いてホタルを探すことで、発見した時の喜びやもっと知りたいという探究心が高まっていったと考える。また、身近な地域の自然を知ったり振り返ったりするよい機会となった。
・今回の活動から、自然体験を豊かにするのは教師だけではないということがよく分かった。親子でのふれあい、地域の専門知識をもった人とのかかわり、絵本や紙芝居といった教材など、幼児の実態や興味関心に応じて取り入れ、興味関心を高めていく大切さを感じた。

ポイント

近隣にホタルの生息地があるという特性を生かし、園児が見つけてきたホタルをきっかけにして活動が展開されています。ホタルに詳しいお年寄りを巻き込んで子どもたちの興味を発展させるなど、地域の自然や人と関わる中で、子どもたちの好奇心や探究心がより豊かに育まれていく様子が伝わってきます。

C-2.「おにいちゃん、おねえちゃんと一緒に遊ぼう」
八幡東幼稚園（福岡県北九州市）　＜5歳児・小学校4年生　4月～7月＞

1. ねらい

幼児が自然に触れて生活するとき、その中での気付きや発見を伝えることができ、受け止め共感してくれる人が周りにいることで、より満足感や充実感を味わうことができる。また、年上の友達と一緒に活動することで様々な刺激を受け、「おもしろそうだな」「どうしてそうなるのかな」「私もやってみよう」と幼児の心が揺さぶられ、知的好奇心が高まっていく。そこで、園庭に沿った川を活用して、隣接する高見小学校の4年生との交流を継続的に行った。

2. 昨年度の反省から

昨年度、小学校のおにいちゃん、おねえちゃんと一緒に遊んだことは、幼児にとって気付きや発見などの多くの経験をさせることとなり、科学への楽しさを感じることとなった。今年度は、互いが自己発揮し、満足感を味わえるような活動を考えていくことが課題である。

この課題を受けて、本年度は、交流しながら親しみを感じ自分の思いを出しながら活動できるように、初めからグループに分かれて活動してきた。そのため早い段階から、それぞれの性格や興味などがわかり活動しやすい雰囲気になっている。また、4年生からしてもらうばかりでなく、刺激を受けながら、「不思議だなあ」と感じたり、自分たちで考えて、試してみようとしたりする心を育てていくようにした。

3. 活動の様子

一緒に川で遊ぶために

何をして遊ぼうかな

教師の読み取り

川の様子を見ながら、「ここは魚がいるからつりが出来るね」「いかだを作って深いところで遊ぼう」などのイメージを膨らませている小学生のことばを聞いて、興味をもち、「どうやってつるのかな」「いかだは何で作るんだろう」と疑問をもっていた。幼児は、普段遊び慣れている川なので、「ここにはお魚がたくさんいるよ」「ここで舟を流して遊べるよ」と自分たちの経験したことを小学生に話しながら、川での遊びに期待をもっている。

小学生からの刺激を受けて遊びへの期待が高まっている。

遊びに必要な物を作ろう

おにいちゃんてすごいね

「大きないかだやね。早く、乗りたいな」と遊びに期待を膨らませている。

「魚はにおいで寄ってくるんだよ」とカレー粉、小麦粉を混ぜた餌を見て、「すごいねぇ」と感心している。

★小学生が実際に作っているのを見て、「すごいな」、「やってみたいな」「どんなふうにして作っているんだろう」と関心をもってじっと見ている。

「自分たちも作ってみたいな」と意欲が増してきているな。どんな材料を準備しようかな。

一緒に遊ぼう

川で遊ぼう

「わぁーいい気持ち。でも、少し恐いな」
幼児の気持ちに合わせて、ゆっくり動かしてくれている。
その後、流れの速いところで乗ると、「あれ、押さなくても動く」と気付いていた。

満足感　挑戦　試す　発見

「どんなところにお魚はいるかな」「そっと見てみよう」
小学生のお姉ちゃんと一緒に魚を捕まえている。
考える　共感　試す

「何が見えるかな」とビニルシートを張ったところを覗いている。「あっ、見えた」「ぼくにもかわって」と次々に覗いている。

ぼくたちもやってみよう

「ガムテープをしっかり貼らんと、水が入って壊れるよ」と小学生との経験をしっかり覚えていて、活動に生かしている。「水の中が見えるようにしたい」という思いから、いかだの中に、透明のシートを貼ったり、ペットボトルを立て向きにつけ、中が覗けるようにした。

小学生と一緒に

幼児の思いを受けて、幼児の作った水の中を見る筒をいかだに取り付けてくれている。

幼児は、自分たちのアイデアが生かされてうれしそうだ。小学生からしてもらうだけでなく、自分たちの思いも生かして、応答関係が出来ているな。

考　察

幼児たちは、4年生たちと一緒に活動するとき、4年生の作ったものや活動している様子などを興味をもってじっと見ている。そして、「すごいなあ」と感動したり「どうしてそうなるのかな」と不思議に思ったりしている。そして次には、「ぼくもやりたいな」「あれ、うまくいかないなあ」「そうだ、こうしていたね」と自分なりに考えたり試したりするようになっていった。4年生との交流を継続することは、幼児の知的好奇心を刺激し、幼児の科学する心が育っていくだろうと考える。また、4年生にしてもらうだけでなく、刺激を受けて自分たちで考えたことを認めてもらったり、遊びの中に生かしたりしていく応答関係を育てていくことが大切である。そのことが、幼児の満足感を生み、「どうすればいいのかな」「またやってみよう」という更なる「科学する心」を育てていくのだと考える。今後は、川遊びだけでなく、繰り返し季節ごとの自然に触れる機会を捉えて、それを生かした遊びを、共に考えていきたい。

ポイント

園庭に沿って流れている川、そして隣接する小学校との連携など、地域の特性を活かした活動が継続的に積み重ねられています。子どもたちは、小学4年生の作ったものや活動の様子に「すごい」と感動し、刺激を受け、今度は、自分でやってみようと試したりして、好奇心をふくらませていきます。

C-3.「メロンの赤ちゃんができたよ」
小垣江東幼稚園（愛知県刈谷市）　＜4・5歳児　5月～7月＞

雄花と雌花があり受粉をして実ができることを知ったり、収穫に期待して世話を続けていったりすることができるスイカとプリンスメロンを選んで、一人一鉢親子栽培をしていくことにした。

5月9日　苗植え

K男はプリンスメロンを選び、「おいしいメロンができるといいな。」と期待して、母親と一緒に苗を植えた。

5月19日～5月29日　つるが伸び雄花が咲く

つるが伸びていく2週間くらいはあまり変化も見られなかったが、葉の枚数を数えて増えていくことを喜んだり、つるがいろいろなところから出てくることを不思議に思ったりしながら世話を続けた。並行して、クラス全体の場で、雄花と雌花があることを知らせ、結婚式（受粉）をしないと赤ちゃん（実）ができないことを知らせた。

少しずつ花が咲き始めた。K男は「先生、花が咲いたよ。」と教師に一番に知らせに来た。「すごいね。よく見つけたね。」と発見したことを認め、「お父さんの花かお母さんかどっち？」と尋ねると、広げてあった絵本と比べて、「こっちの花だった。」と雄花を指差した。「そっか。お父さんの花が先に咲いたんだね。お母さんの花は赤ちゃんがついているからね。よく見て探してね。」と話すと、友達と一緒に絵本の雄花と雌花を比べて見ていた。

5月30日　プリンスメロンの結婚式（受粉）

1週間ほどすると雌花がつき、母親と登園して雌花を見つけると「先生、お母さんの花が咲いた！」と大きな声で伝えに来た。「よかったね。すぐに結婚式しないとね。」と教師も鉢のところへ行き、母親が受粉してくれるのを一緒に見た。そして、「これでメロンの赤ちゃん大きくなっていくよ。お水忘れないで毎日、お世話してあげてね。」と声をかけると「うん。」と張り切って答えた。

スイカの受粉の様子、プリンスメロンも同じように受粉した。

5月31日　大きくなることに期待して親子で毎日、チェック！

その後も、雌花がつくと母親に知らせて受粉をしてもらい2個の実をつけることができた。毎朝、母親と鉢を覗き、「ちょっと、大きくなったみたい。」と少しずつ大きくなっていくことを喜んでいた。教師はより収穫を期待できるように、「Kくん、プリンスメロンはね、もう食べてもいいよってちゃんと教えてくれるんだよ。」と話すと、「えー、どうやって？」と不思議に思って聞いてきた。「メロンはね、食べごろになると色が少し変わってきて、お尻のほうが甘いにおいがするんだよ。それから、ポロッと茎から取れるんだよ。」と知らせると「ふーん。」とわからないような顔をしていた。しかし、近くにいた母親は、「へー、そうなんですか。」と納得していた。40日ほど経って、教師が言ったように、実が白っぽくなり店で売っているものに似てきた。同時に、お尻のほうの匂いを嗅いでみるとプリンスメロンの熟した甘い匂いがした。K男の母親が匂いを発見してK男に伝えると、K男も匂いを嗅いで「本当だ。すっごくいいにおいがする！」とうれしそうに答えた。K男はうれしくて近くにいる友達に、「ほら、いいにおいがするよ。」と次から次に友達に声を掛けていた。

7月7日　1個目を収穫・親子で喜ぶ

翌日、メロンが茎から外れてネットの上に落ちていた。K男はプリンスメロンを手に取ると、すぐに、匂いを嗅いだ。昨日と同じ甘い匂いがするのを確認すると母親や教師の鼻に近づけ、「いいにおいでしょ。」とにこにこしていた。クラスで一番目の収穫であったので、全体の場で紹介し、みんなで匂いを嗅いだ。「本当だ。メロンの匂いがする。」「いいにおいだね。」「K君いいな。」とみんなから言われ喜んでいた。その日、プリンスメロンを持ち帰り家庭で食べた。

翌日、登園してきたK男と母親に味わった感想を聞くと、K男「すっごく、おいしかった。」と笑顔で答えた。母親も、「本当に甘くておいしかったです。植木鉢でもちゃんとできるんですね。」と喜んで話してくださった。

実が落ちないようにハンモックのようにネットで支えられてどんどん大きくなる。

ポイント

親子栽培の事例です。毎日の登園時に親子で一緒に観察する中で、保護者自身も自然のすばらしさに感動している様子を保育者が捉えています。その保護者の感動が子どもに伝わり、子どもの興味や喜びを大きくすることにつながっているのではないでしょうか。

C-4.「虫博士がやってきた！」
西戸山幼稚園（東京都新宿区）　＜5歳児　6月＞

園内での遊びの発展から、ゲストティーチャーとして、プロナチュラリストの方に来ていただき、フィールドビンゴゲームに参加していただいた。その時の子どもたちとのやり取りは、私たち教師とのかかわりにはない、「虫博士」とのキラキラ体験であり、その後の遊びに大きな影響をもたらしている。自然に関心が高まっているちょうどそのときに、虫博士と出会えたことで、どの幼児も興味を持って話を聞くことができた。

◎虫博士がやってきた！

アゲハがかえった翌日、ナチュラリストの佐々木洋先生が来園する。イチジクの葉にいる虫を容器に入れて見せ、「これはね、葉虫といって、葉っぱを食べるんだよ。カブトムシの仲間だよ」と話を始めると、園庭に散らばっていた幼児が徐々に集まり始める。ずっとくっついて次々に質問をする幼児。一つ一つの話に目を丸くして聞き入る幼児。モンシロチョウの幼虫がきれいに食べて筋だけになったキャベツを見ていると、ハチが幼虫を食べ始める。先生が「すごいところを見られたね。食べてるよ。ハチだって食べ物がないと生きていけないものね。アオムシをお団子にしているよ。ハチの子どもに餌を運んでいくんだね。」の説明に、逃げるどころか顔を近づけ声も出さずにみんなで見ている。青虫団子を足で持ちよろよろと飛び立つハチを「おーっ」と声を出してみる幼児、「半分残ってるよ」と言う幼児に「一度に持っていけなかったんだね。今日ではないかもしれないけど必ずまた取りに戻ってくるよ。」の説明で、残ったアオムシ団子をのぞき込む幼児がいる。

保育室に集まり、質問コーナーでは「カマキリはどうして100個もたくさん卵を産むんですか」「どうしてカマキリの赤ちゃんはこうやって逆さまに出てくるんですか。」「ダンゴムシはどうして丸まるんですか」などの質問が出る。降園の支度があるのに、みんなで先生の後を付いていってしまうほどであった。

◎ぼくたちも虫博士

翌日、登園して靴を履き替える前に保育室の前のキャベツを見て「昨日のハチが残していったアオムシの団子がなくなってるよ」「どこ？本当だ」「取りに来たんじゃないの」と話している。身支度を済ますとカラー帽のつばを後ろに回して「佐々木先生と同じかぶり方だよ」と言いながら歩いている幼児もいる。別の場所では虫眼鏡、自由画帳、マーカーを持ち、「昨日あんなにいたハチが全然いない」「バナナ虫もいない」「カタツムリはいた。ブロックにいた」と歩き回り、「研究所を作ろう」とアスレチックの中にベンチを持ち込み、楽しそうに話をしている。

降園時、保護者から「昨日は家でずーっと虫のことばかり話していたんですよ。」「会う人みんなに虫博士の話をしていたんです。」など、佐々木先生とのかかわりの話が多く聞かれた。

佐々木先生が来た後、Y児は園庭の木々や草花のところによくいて、虫をみつけることが多くなった。虫の図鑑を見ていることも多くなった。プランターのキャベツのところにいるアオムシを手に取り、「あっ、これはモンキチョウの幼虫だよ。ほら、背中に筋が入ってるでしょ。黄色い線が。家の図鑑に載ってたよ。」と近くにいる友達に見せている。しばらくすると「アオムシマユコバチがまた来てるよ。」とまたキャベツのプランターをみている。

考　察

幼児の感動が大きければ、もっとやりたい、もっと知りたい、なぜだろうと興味、関心は広がり、深まっていく。それを一緒に楽しめる教師の感性、やろうとしている気持ちや行動を受け止め、保障してあげることが大切である。

ポイント

子どもたちの「なぜだろう、もっと知りたい」という気持ちを更に広げ、深めていくために、専門家のサポートをうまく活用しています。子どもたちだけでなく、保育者も自然への関わり方や面白さを知り、関心を高めていくことにより、子どもたちの感動を広く受け止められるようになるのだと思います。

3章「科学する心を育てる」創意・工夫

子どもたちの「科学する心」を育てるために、各園でさまざまな創意・工夫が生まれました。第3章では、各園のキラリと光るアイディアを紹介します。いろいろな事例や工夫を、ぜひ皆様の園の「科学する心を育てる」実践に活かしていただきたいと思います。

1. 五感を拓く もりのみち作り
二葉幼稚園・二葉つぼみ保育園（東京都品川区）

情緒性と感覚を培うために・・・

科学する心を育むためには、遊びの中で発見したり、感じたり、考えたり、疑問に思ったり、実現したりしていくことが大切だと考えている。そこでまず、感じる心（感性）を研ぎ澄ましていく事が必要だと考える。そのために、五感を拓く環境を開発していきたいと思っている。

◆今年度までの取り組み　もりのみち作りPart1

園舎の周りを回遊することで、幼児の探索活動が豊かになるといわれている。

そこで、本園では、園舎の周りを廻って遊べるように、園舎裏を「もりのみち」と名づけ、粗朶を置いたり、木を植えたりして自然（虫）を呼び込み、幼児たちが自由に遊べる場にしてきた。今年度はさらに、五感を拓く空間にしたいと考え、「もりのみち」作りを進めてきた。

具体的には、見て感じとったり、道を通ることで足の裏から素材の感覚を感じたりできるように、いろいろな大きさ、色、材質の石や丸太、ウッドチップや砂、ブロックなどを順に敷き詰めて置き、体感や視覚などに訴える空間を創り出した。

◆豊かな探索活動

「もりのみち」の変化に気付いた幼児が、自分で、または友達や教師と一緒に「もりのみち」を通って遊ぶようになった。幼児同士の伝え合いにより幼児の中に新しい空間の楽しさが伝わり、多くの幼児が「もりのみち」を通って遊ぶようになった。

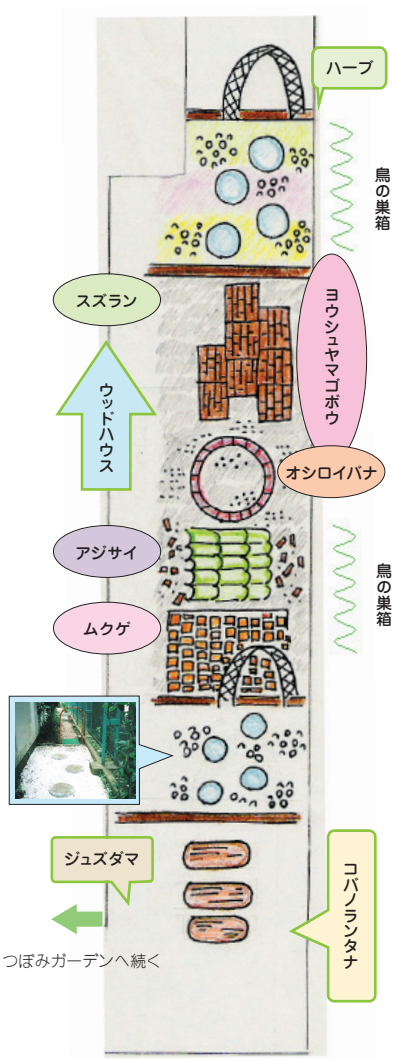
7月、A児、B児が「探検」と言って、「もりのみち」を散策して遊んでいた。ピンク、クリーム、グリーンの石が敷き詰められた道の終わり部分に着いた時、B児が「ここでおしまい」とつぶやくと、その言葉を聞いたA児が「もっと道は続くよ」と言う。その後、「こんな道があったら面白い」「どんどん作ってにこにこ通りまで続いていったら楽しい」と考えを出し合い、夢を膨らませて楽しんでいた。

◆これからの取り組み　もりのみち作りPart2

今後も五感を拓く空間として、ハーブ類など植物を増やしたり、鳥の巣箱を置いて自然を呼び込んだり、幼児の憩いのスペースとしてウッドハウスを置いたりしていくことを考えている。

「もりのみち」が子どもたちにとってさらに楽しい空間になっていくように、子どもと共に考えながら道作りを進めていきたい。

「もっとみちはつづくよ」
「もりのみち」作り



ポイント

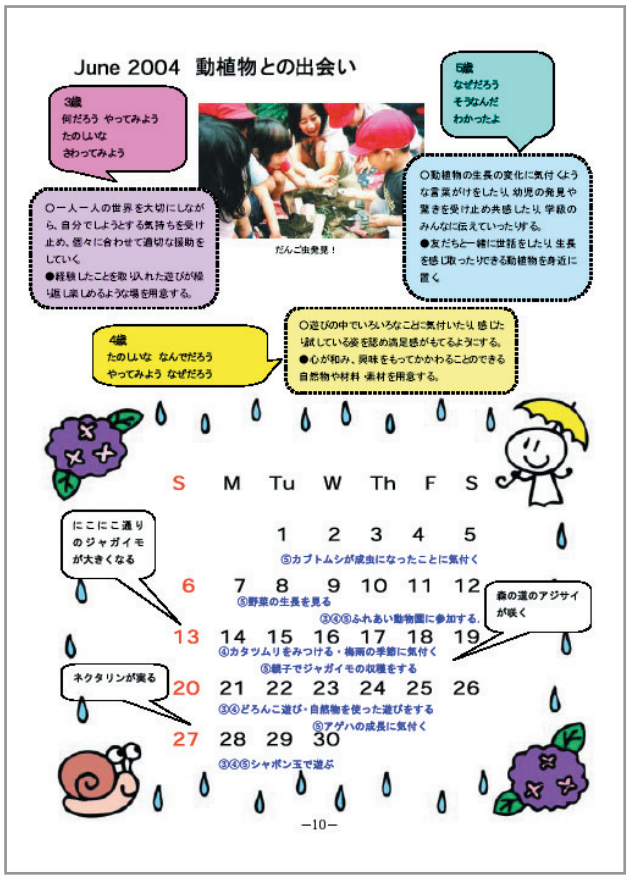
子どもたちが園舎の周りを廻って遊べるようにと、都会の限りある園庭を上手に活用し、何もなかった園舎裏に子どもたちと「もりのみち」を作りました。子どもたちの五感を拓く空間をつくるという思いを大切にして、素材や構成に様々な工夫がこらされています。この「もりのみちづくり」は子どもたちと先生方が共に考えながら、さらに楽しい空間を作るために進められていきます。

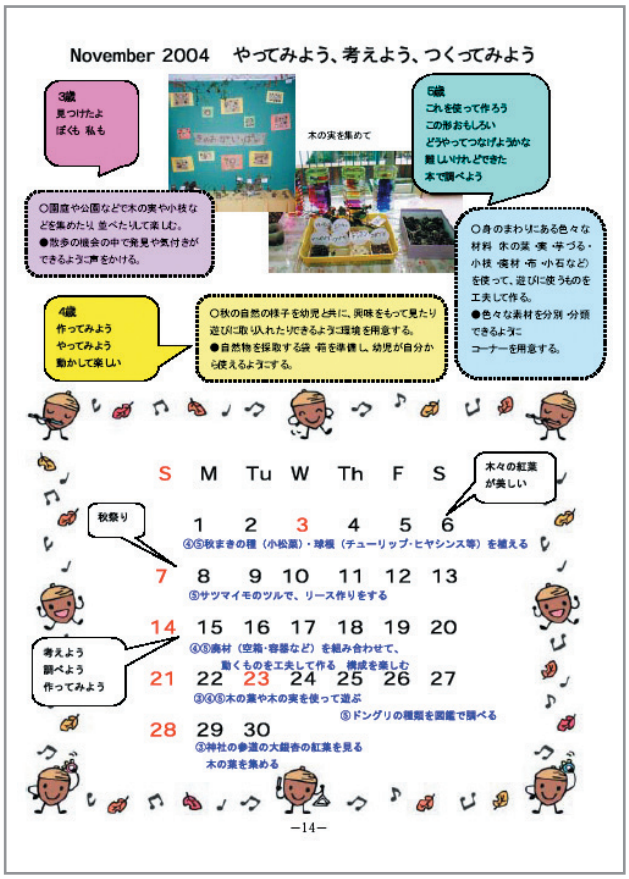
2. みんなで育てよう科学する心　実践カレンダー
二葉幼稚園・二葉つぼみ保育園（東京都品川区）

◎みんなで育てよう科学する心　実践カレンダーについて

幼児は日々成長し、自然は日々変化する。この成長や変化を適切に捉え、環境や援助に反映させていくことが、感じ、考え、実現する幼児を育成していくためには必要である。そのためには、ティームで保育を進めているスタッフが、目的や指導のポイントを明確にして保育する必要がある。

そこで、2004年4月から2005年3月までの‘みんなで育てよう科学する心’実践カレンダーの中に、育てたい科学する心と環境、教師の援助を入れて作ることでスタッフ全員が科学する心を育てることを目指しておけるようにと考えた。また、この実践を通してより深く科学する心を探っていきたいと考えている。





カレンダーの③、④、⑤は年齢を表す

ポイント

長年にわたって積み重ねてきた実践に裏付けられた活動計画とその時々の自然の変化が、1年分のカレンダーとして見やすくまとめられています。また、このカレンダーはティームで保育を行う際に、目的や指導のポイントを共有する重要なツールとして活用されています。

3. 豊かな自然体験と絵本のかかわり
江戸川双葉幼稚園（東京都江戸川区）

センス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目を見張る感性）、つまり不思議心にあふれて人生を歩みだし、生涯にわたって、その感性に満ち満ちてすごしてほしい。そんな願いを込めて、私たちの教育理念は、自然とのかかわりを根底に据え、豊かな自然体験を元に、それを整理統合できるような科学絵本や心を耕す優れた絵本に絶えず身近に接することができるように、自然とのかかわりと絵本体験を大きな柱として保育計画を組み上げている。

【春のエピソード①】　「アゲハの幼虫、見つけたよ！」

「見て！アゲハの幼虫！」「これはクロアゲハだと思うよ」「脱皮したよ」「さなぎになるんじゃない？」と、観察は続き、その成長を楽しんだ。幼虫の模様の違いなどからアゲハの種類を予想したり、絵本や図鑑と首っ引きで虫談義に花が咲く。

先生に絵本**『あげは』**や**『おおきくなったらなににになるの？』**を呼んでもらったり、ライブラリーから**『ちょう』**を借りてきて見比べたり・・・。年長になると、それまでの経験から、それぞれの蝶の食草の地がことなどもわかってくる。人参のキアゲハも含め、今年も約20匹の蝶を羽化させることになった。

【春のエピソード②】　「カマキリの赤ちゃんが生まれた！」

5月半ばにカマキリの卵嚢から、糸につながったような小さなカマキリの赤ちゃんが誕生した。登園してきた子供たちとそのお母さんたちが、固唾を飲んで見守る。こんな小さいのにしっかりとカマキリの姿をしている！そしてそれぞれに散らばってゆく。

「カマキリのお母さんは？」と問う子もいる。そう、カマキリの赤ちゃんは一人で生きていかなくてはならないのだ。**『162ひきのカマキリたち』**と同じ場面を最近は毎年のように観察できる。

一個の卵嚢から200匹前後のカマキリの赤ちゃんが生まれる。ここで生みつけられた卵嚢と、野原から取ってきたものと合わせて3～4個から生まれたたくさんの子供のカマキリたち。時折見せる大きくなってゆく姿に感動する。

【エピソード③】　子どもの「なぜ？」に寄り添って

「すなってなーに？何でできてるの？」

子どもの問いには、時として、実に深い真理に迫るものがある。本当のところ「砂」って、「土」って何なのでしょう。私たちはこの問いに真剣に応えようと思った。そしてまずスイカを食べた後の皮を地面に埋めることから始めた。子どもたちに見せながら一緒に行うことにした。

夏休みが明けて2学期を迎えた時、「あのスイカどうなった？」と思い出してくれた子の一言をきっかけに、木の下の埋めた辺りを手に手にシャベルを持って掘り返し始めた。何本かヒョロヒョロとスイカが芽を出していたが、そんなことはお構いなしに、「あれ？ない」「確かにこの辺」と相当広い範囲まで掘ってしまった。それでも、ない。「なくなっちゃったんだ」「溶けちゃったんだ」子どもたちは口々に言い、だんだん核心に迫ってきた。そこで科学絵本**『くさる』**を読み聞かせる。何気なく踏んでいる土や砂でも、そこからずっとずっと昔の恐竜にまで結びつくような命のつながりがあることを知り、動物や植物、大好きなだんご虫やミミズや、そして目に見えない小さな生き物たちへの命のつながり（生態系・食物連鎖）を感じるきっかけになる。「あぁそうか」と深く納得しながら聞き入る子どもたちの表情が、知る喜びに輝く。

自然とのかかわりで使う絵本リスト

■春から夏へ、草花虫との関連で

『ちょうちょはやくこないかな（甲斐信枝さく）』
『きいろいはなみつけた』（甲斐信枝さく）
『おーい、めだか』（島津和子さく）
『てんとうむしのとん』（得田之久さく）
『かまきりのちょん』（得田之久さく）
『昆虫　ちいさなかまたち』（得田之久さく）
『きゃべつばたけのぴょっこり』（甲斐信枝さく）
『モンシロチョウはなにがすき』（藤井恒ぶん　たかはしきよしえ）
『たんぽぽ』（平山和子さく）
『つくし』（甲斐信枝さく）
『にわさきのむし』（小林俊樹ぶん　たかはしきよしえ）
『あげは』（小林勇さく）
『きゃべつばたけのいちにち』（甲斐信枝さく）
『ちょう』（大島進一さく）
『おおきくなったらなににになるの？』（島津和子さく）
『いちご』（平山和子さく）
『かたつむり』（得田之久さく　1984年年少版こどものとも）
『かたつむり』（夏目義一さく　1997年かがくのとも）
『よもぎだんご』（さとうわきこ作）
『たべられるしょくぶつ』（森谷憲ぶん　寺島龍一え）
『ざっそう』（甲斐信枝さく）
『おいしい野草』（高森登志夫え　丸山尚敏ぶん）
『はるのたんぽ』（菅原久夫ぶん　高森登志夫え）
『すみれとあり』（矢間芳子さく）
『ぼく、だんごむし』（得田之久ぶん　たかはしきよしえ）
『かぶとむしはどこ？』（松岡達英さく）
『木』（佐藤忠良／画　木島始／文）
『かまきりのこどもがうまれた』（得田之久さく）
『162ひきのカマキリたち』（得田之久さく）
『ピーナッツ　なんきんまめ　らっかせい』（こうやすすむ文）
『だいず　えだまめ　まめもやし』（こうやすすむ文）
『さつまいも』（小宮山洋夫さく）
『みずのなかのちいさなせかい』（三芳悌吉さく）
『ざりがに』（吉崎正巳さく）
『野の草花』（古矢一穂ぶん　高森登志夫え）
『たねがとぶ』（甲斐信枝さく）
『たねのりょこう』（ウェーバー作）
『花がえらぶ　虫がえらぶ』（山下恵子ぶん　松岡達英え）
『野菜の花が咲いたよ』（北篠純之文・写真）

■虫歯予防デーや足型取り、からだ・健康関連

『ははははのはなし』（加古里子さく）
『ちのはなし』（堀内誠一さく）
『みんなうんち』（五味太郎さく）
『あしのうらのはなし』（柳生弦一郎さく）
『おへそのひみつ』（柳生弦一郎さく）
『おっぱいのひみつ』（柳生弦一郎さく）
『からだのなかでドゥンドゥンドゥン』（木坂涼ぶん　あべ弘士え）

■かいこや綿との関係で便利な本

『かいこ』（熊谷元一さく）
『わた』（宮川桃子ぶん　今井真利子え）
『ペレのあたらしいふく』（ベスコフ作）
『つるにょうぼう』（矢川澄子再話　赤羽末吉絵）

■梅雨の頃に最適の本

『しぶくのぼうけん』（テルリコフスカさく　内田りさこ訳）
『かわ』（加古里子さく）
『かわはながれる』（ロジャンコフスキーえ　岩波書店）
『あめのひ』（シュルビッツ作　矢川澄子訳）
『みず』（長谷川摂子文　英伸三写真）

■土や生命・死についての本

『くさる』（なかのひろたか作）
『せいめいのれきし』　（バートン作　岩波書店）
『わすれられないおくりもの』（スーザン・バーレイ作　評論社）
『ずーっとずっとだいすきだよ』（ウィルヘルム作　評論社）
『葉っぱのフレディ』（レオ・バスカーリア作　童話屋）

■秋から冬そして春を待つときに最適

『たべられるきのみ』（菅原久夫ぶん　高森登志夫え）
『ぼくはたね』（甲斐信枝さく）
『ひやしんす』（平山和子さく）
『ふゆめがっしょうだん』（富成忠夫　茂木透＝写真　長新太＝文）
『かれくさつみ』（あきやまじゅんこ作）
『ぽとんぽとんはなんのおと』（神沢利子さく　林明子え）
『ゆりかもめ』（石部虎二さく）
『ふきのとう』（甲斐信枝さく）
『ゆきどけみず』（野坂勇作さく）
『冬の虫冬の自然』（たかはしきよし絵　奥本大三郎文）

■作って遊ぶとき

『ほねなしカイト』（蒲倉一郎発明）
『つくってあそぼう』（大隈紀和構成）
『しゃぼんだまとあそぼう』（杉山弘之　杉山輝行）
『たこ』（加古里子さく）
『かみひこうき』（小林実ぶん　林明子え）
『あきかんでつくろう』（よしださみまろ作）
『いとでんわ』（小林実ぶん　荒木桜子え）

■飼育・栽培に関して

『育てて遊ぼう』シリーズ全巻（農文協出版）

※出版社名のないものはすべて福音館

ポイント

都会の中の小さな園庭に、様々な工夫によって自然を育み、自然体験を大切にした活動が豊かに行われています。長年にわたって集められた、自然と関わる様々なジャンルの絵本が、すぐに使えるようにライブラリとして、わかりやすく整備されています。そして、これらの絵本が日々の実践の中で、とても効果的に活用され、子どもたちの不思議心が育まれています。

4.「ペットボトル大作戦」　ー地域への働きかけー
小垣江幼稚園（愛知県刈谷市）

ねらい

- ペットボトルを遊具や園内環境に利用することで幼児の創造性を膨らませる。
- 自分が作ったもので遊んだり、園内の環境に生かされる楽しさやうれしさを味わう。
- リサイクルやものを大切にする心を養う。
- 保護者や地域の方と一緒に活動する中で、いろいろな人とかかわり、温かい思いに触れたり、感謝の気持ちを持ったりする。

「たくさん集まるといいね」

活動内容

- ペットボトル及びキャップを家庭や地域で集める。
- ペットボトルを使った遊具作りをする。（水遊び遊具、かざぐるまなどを作って遊ぶ。）
- 親子でペットボトルを使って遊ぶ。（夏休みに保護者へ作り方を知らせる。）
- ペットボトルを使った環境整備をする。（親子でパネル作りをしたり、ペットボトルプランタに苗を栽培する。それを地域に配布する。）

「およぐよ、およぐよ」お魚ペットボトル

「ペットボトルシャワー楽しいね」

親子一緒にモザイク画製作

活動計画

5月　ペットボトルとキャップ集め
6月　水遊び遊具作り
8月　家庭でペットボトル遊具作り
10月　ペットボトルプランタ作りと花栽培
1月　パネル完成
2月　ペットボトルプランタの花を地域に配布

「これにお花を植えるんだよ」
（親子でペットボトルに色塗りをします。）

ペットボトルで作ったプランタを
地域に配ります。

ポイント

ペットボトルという一つの素材を手作りのおもちゃや園内環境整備など様々な用途に利用することを通して、子どもたちの創造性を育むとともに、遊びを通して、その活動を親子（家庭）へ広げています。さらには、地域と連携をとりながら、大規模なペットボトルの回収へと広げています。また、その活動は年間を通して計画的に行われ、回収に協力してくれた地域の方々に、手作りのペットボトル・プランタに花を育てプレゼントすること通して感謝の心を育むことで結ばれています。

5.「園外保育」
みくに幼稚園（千葉県柏市）

◆園外保育のねらい

・親とは離れ友達や先生と一緒に見学し、本物に触れたり、見たりする中で、五感で、物事の真理を感じ取る。
・電車を利用することにより公共の場所や車内でのルールやマナーを身につける。

◆園外保育の選定条件

テレビや図鑑で名称や形状、成り立ちはわかっていても、実際に実物を見て、触れることによって理解し、自己のものとできるものが多々あります。そのため、園外保育を選定するには下記の条件で選んでいます。

1. 本物であること　魅力的で想像力をかきたてるもの。そのものでなければ伝えられない雰囲気があり、実物があることで同じものを見ているという感動をあじわえるもの。
2. 教育の場　物事をわかりやすく設置してあり、説明、理解しやすいもので、触れることにより、子どもが自分自身で対応できるもの。
3. 意図があるもの　実際に体験する中で、新たな問題を発見し、人間としての生き方、科学のあり方などが示されているもの。

◆事例1「恐竜と鶏が仲間？」（科学博物館にて）

上野の科学博物館内の探検館で遊んだときのことです。恐竜が大好きな子どもたち、骨格標本を見て大喜び。

「この恐竜は何を食べていたのかな？」周髪をいれずに「肉食」「ほかの恐竜だよ。」

「そうなんだ。じゃあ、こっちのは。」またまた、「草食」「草だよ。」

「みんなよく知ってるね。どうして分かったの。」「だって歯がとんがっているのと、歯が四角いのでわかるの。」みんな、納得顔。そこで、「ほかにどんなとこが違うのかな。」みんな真剣に再度目の前の恐竜を見始めました。

「頭のおおきさ。」「手が小さい。」「尻尾の大きさ。」そのうち、Dちゃんが、「あれ、足の指4本しかないよ。」みんな後ろ足に注目し始めました。「ほんとだ、でも後ろにも伸びてるよ。」「ニワトリの足みたい。」前に抱いたことがあるウコッケイを思い出したのでしょうか、ほかの子どもたちも、「ホントだ、おんなじだ。」といい始めました。

◆事例2「文字が読めないことに感謝して？」（水族園にて）

見学に際しては、まず子ども達に気づかせることを一番とします。そして、何故かをみんなで考えていきます。知ってる知らないではなく、「見つけた、気づいた、どうしてか」を大切にします。情報が溢れている時代ですから子どもたちの情報量ものすごいものがあります。だからこそ、知識量ではなく、何故、どうしてと考えることが大切なのです。

「頭が四角いね。」「目が横についている。」「口がない」「あるよ。下のほうだよ。」「違うよ、よこだよ。」「おなかの白いとこが口だよ。」「あそこから空気をすってるんだよ。」「何で、あの魚をたべないんだ。」「あれは、エイだよ。」子どもたちは互いに気づいたことを口々に表現しながら見方を進展させていきます。教師は時々、アドバイスをするまでです。想像力、観察力を十分に発揮させるには名前を知らせないほうがいいときもあります。潮時を見て、「このサメの名前はハンマーヘッドシャークっていう名前なんだって。」すかさず、子どもたちから「英語？」「わからない」教師［かなづち、トンカチだよ］「わかった、頭の形だ。」名前を知って一つのものの整理が最後につくのです。

◆園外保育のあとに・・・

園児たちが園外保育にいってきた感動を家で家族に伝え、今度は家族で同じ場所に出かけて感動を共有するといったことも多々あるようです。子ども同士の発見と親子の触れ合い2度の楽しみが生まれています。

◆園外保育の行き先

野田しょうゆ工場、羽田飛行場、静岡県吉奈温泉二泊三日宿泊保育、交通博物館、劇場にての観劇会、とうもろこしもぎ、いもほり、科学博物館、手賀の丘少年自然の家にて宿泊保育、葛西臨海公園、上野動物園　など

ポイント

本物に触れたり、見たりする中で、五感で物事の真理を感じ取ることを大切にした園外保育。その行き先の決め方、頻度、交通手段、さらには、子どもたちだけで行くことに対するこだわりなど、一つ一つに子どもたちの豊かな感性を育むための思いが込められ、工夫されています。

6. 子どもの感性をゆさぶる「科学遊び」 ー現場の教師のとまどいー
こまどり幼稚園（秋田県秋田市）

この「科学遊び」は課題遊びに属するもので，担任を中心に年間計画に基づき、意図的にまとまった科学遊びとして展開されます。教師の演示によって、興味深く不思議な事物や現象によって刺激された子ども達は，自分の好みに応じて主体的な遊びへと導かれます。その過程で教師は子どもの興味や好奇心をよく把握し、遊びがさらに拡がるように援助します。最後に遊びのまとめと評価が行われます。

とまどい
教師の不安

科学的遊びに対する当初の教師の不安

①これまでの自由保育形態の中に突然このような形で聞いたことも無いような遊びを持ち込んでも良いだろうか

②これを3歳児にやるのはとても無理なことである。

③新しい科学遊びの保育に当り,現場の教師は何をねらいとし、（科学的意味合いも含めて）どのようなやり方をしたら良いか戸惑うばかりである。

話し合い

これを真摯に受け止め、しかし、諦めず辛抱強く意見を交わしながら次のような形で理解が成立しました。

①今後自由保育と課題保育の組み合わせ方式とし、科学遊びは後者の課題保育の時間でやる。

②3歳児でも内容によっては充分やれるという事例が挙がったので大丈夫と思われる。

③の現場教師の不安を解決するために委員によって指導の手引きを作成する。各月の終わりに翌月分の題材について,この手引きを用いた解説や必要な講習会をやるから大丈夫。

科学遊びはあくまでも自然に対する興味を高め、そして不思議さ、おもしろさ等の感性を育てるのが目的であって、科学の知識が目的ではない。思考活動も理論的ではなく試行錯誤の過程こそ意味がある。ということで、理解が成立したのです。

勇気ある実践
研究保育

さて、理解は成立したものの、いざ実施となるとなかなかふん切りがつかず1ヶ月位経過したその時です。当時4歳児の担任だったＴ教諭が「とにかくやってみないことには先に進まないから、私がやってみます」と言って、「磁石遊び」の題材で研究保育をやってくれたのです。

科学への興味

子ども達は目を輝かし、磁石の不思議なはたらきに驚き、歓声をあげながら思い思いの試みに熱中しました。

子ども達の感性に及ぼすすばらしい効果に担任のＴ教諭自身こんなこと初めてと驚くばかりでした。

教師の成長

この貴重な勇気ある実践によって、科学遊びが明るい展望のもとに、本格的研究実践に入り、回を重ねるごとに教師自身の科学的教養も高まり、科学への興味を増しつつ現在に至っています。これまで園長中心の委員会が立案していた年間計画を、教務主任を中心に現場で起案するようになり、現場の成長が示されました。

科学遊びの年間計画

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
年少		うさぎやちゃぼ	この音なあに	風ぐるま		さわってかいで	箱の中なあに	磁石遊び	鏡遊び		万華鏡	
年中		くるくるリボン	輪ゴム	氷作り シャボン玉		磁石遊び	こまあそび	木の実遊び	音遊び		氷と水 木の芽	
年長		鏡遊び	シャボン玉	川遊び *(水てっぽう)		ゴム風船	むしめがね *(色水遊び)	静電気 *(やじろべえ)	糸電話		電気遊び	

ポイント

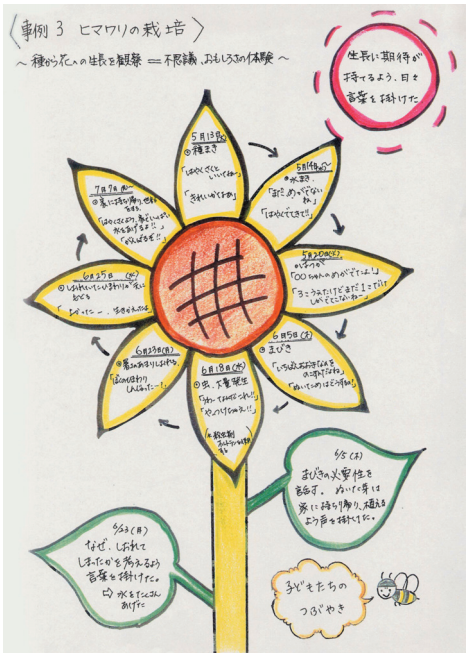
「科学遊び」を日常の実践に取り入れようとしたとき、現場の先生方には様々な不安がありましたが、その不安を一つひとつ取り除いて、先生方自身が明るい展望を持って科学遊びに取り組めるようになってきました。先生方を変えたきっかけは、科学遊びに熱中する子どもたちの姿でした。

7. 実践してわかったこと　ー確実に科学する心が育っているー
加曽利幼稚園（千葉県千葉市）

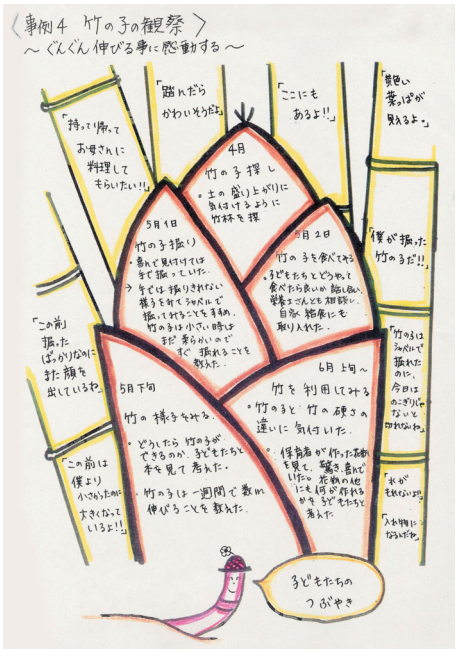
「科学が育つ芽」という視点で「ヒマワリ」「竹の子」の実践を分析すると、科学の心が育つ教材であることがわかった。教材を８つの視点で見直すことにより、保育者の意識が変わり、指導にきめ細やかさが生まれてきた。

●実践の様子

①ヒマワリの栽培（年長）



②竹の子の観察（年長）



●実践してわかったこと

①ヒマワリの栽培（年長）

←科学が育つ芽→　←科学の心【評価】→

	疑問をもつ	触れる	かく	見る	聞く	味わう	伝え合う	感動する	
・一人ひとりが自分の植木鉢で花を育てるということで、自分のものという意識が芽生え、花を育てていくうえでも責任感が生まれ、植物に対する思いやりが育った。		◎	○	○				○	好奇心の芽生え【気付く】
・花の生長の様子に気付くと共に、生長するためには世話をすること（水やり、まびき等）が大切ということに気付くことができた。	○	○		○		◎			興味・関心の深まり【感じる】
・芽がでたときや花が咲いたとき、うれしさや感動を味わい、植物の生長を期待する心が育った。				○			○	◎	言葉・表現の成長【共有】
・植物の成長に関して友だちとの会話が増え、言語の発達や友だちとのかかわりに成長が見られた。					○		◎		自然の不思議さに驚き、感動する心【体験→感動】

②竹の子の観察（年長）

	疑問をもつ	触れる	かく	見る	聞く	味わう	伝え合う	感動する	
・竹の子掘りに大変興味をもち、楽しみながら掘っていた。		◎		○				○	好奇心の芽生え【感じる】
・掘った竹の子で料理（竹の子ご飯）を十分に味わい、喜んでいた。			○	○		◎			言語、表現の成長【共有】
・早く成長する竹の子に気付き、「なぜこんなに大きくなるのか」という疑問に思うことができた。	◎				○		○	○	植物の生長に驚き、感動する心【体験→優しい心】
・竹を切って花瓶にしたことで竹でさまざまなものを作ることができることを知り、好奇心を養うことができた。	○	○		○			○	◎	収穫の喜び【自信】

ポイント

自分たちの日々の実践を「科学が育つ芽」という視点から具体的に分析し、その見直しを図っています。加曽利幼稚園は350名を超える大規模園ですが、園全体で客観的に保育を見直すことで、個々の保育者の保育がきめ細やかになるだけでなく、次に新たな実践課題を見つけることにもつながります。

8. 科学性の芽ばえを培う豊かな環境づくりを求めて
常盤会短期大学付属泉丘幼稚園（大阪府堺市）

今年度は研究主題を「科学性の芽ばえを培う豊かな環境づくりを求めて」として、子どもたちが自然とかかわって遊ぶ姿を、今一度見つめ直し、具体的な計画を立て、その環境構成や教師の援助、子どもの姿を、様々な事例を通して研究をすすめていこうと考えた。

研究計画

・1学期の遊びの計画を立て、実践を記録にとる。
・学年主任を中心に、遊びの実際や、予定している遊びの指導の内容について討議し、遊びの充実を図る。
・遊びの記録をとり、事例研究や、研究会議をする場をもうけ、教師側の視点から遊びを見つめ、教師の指導性・子どもを見る目を高める機会を持つ。

自由討議　～実践のあとに～

1学期終了後、各自がまとめた事例を中心に、環境構成や教師の援助、子どもの姿はどうであったかなど思いを出し合って、自由討議を行った。

〈3歳児の事例から〉
・子どもが遊びの中で体験する偶然の出会い、その一瞬を見る目、感じる目をキャッチできる教師の目こそが、教師として科学する心を育てていけるのではないか。
・〈子どもってこうなんだ〉という日頃遊んでいる姿をいっぱい書きとめてたくわえていくことで子どもの遊びを理解していき、発展していくのではないか。

〈4歳児の事例から〉
・子どもが遊びの中で気づいたことに寄り添い、素直に一緒に喜べる自分でありたい。生き生きと遊んでいる姿を見ても、“これは何か次の遊びにつながなければ”という思いが強くなりすぎ、子どもを見失ってしまいしょうになる。
・生活していくなかで子どもはものの仕組みがわかってくる。子どもが体験を通して考えられていく場を多くしていく。

＜5歳児の事例から＞
・子どもが遊んでいる中で、子どもが悩んだりつまづいていたりしている場面で、教師がでていくタイミングがとても難しい。
・教師が少し違う側面から子どもを見る、子どもを待つことで、新しい科学する芽を見つけることができるのではないか。

ポイント

子どもが自然とかかわって遊ぶ姿を改めて見つめ直しています。日々の保育を記録にまとめ、自由討議の場で、個々の保育者の率直な思いや迷いまでも共有しています。こうした取り組みは、子どもに対する視点を深めるとともに、園全体で、心をひとつにして保育にあたるための大切な源となるでしょう。

【掲載園一覧】

園　名	理事長・園長	所在地	TEL	Fax	園児数
札幌市立**もいわ幼稚園**	塩谷　裕美子	札幌市南区川沿18条2-1-13	011-571-5850	011-571-4039	90
学校法人見真学園 **こまどり幼稚園**	渡辺　丈夫	秋田県秋田市横森5-1-29	018-834-0968	018-834-0968	212
学校法人中沢学園 **会津若葉幼稚園**	中澤　剛	福島県会津若松市湯川町3-74	0242-27-5195	0242-26-9094	196
宇都宮大学教育学部附属幼稚園	石崎　忠利	栃木県宇都宮市松原1-7-38	028-622-9051	028-625-8016	154
みくに幼稚園	杉山　智	千葉県柏市旭町1-6-14	04-7145-2843	04-7169-3920	131
学校法人桐葉学園 **加曽利幼稚園**	片岡　和江	千葉県千葉市若葉区加曽利町953-3	043-231-3065	043-231-4736	371
学校法人菅原学園 **江戸川双葉幼稚園**	菅原　祐治	東京都江戸川区北小岩2-20-18	03-3657-1959	03-5693-4886	113
品川区立**二葉幼稚園・二葉つぼみ保育園**	大竹　節子	東京都品川区二葉1-3-24	03-3785-9560	03-3782-6601	120
刈谷市立**小垣江幼稚園**	稲垣　江利子	愛知県刈谷市小垣江町西王地1-1	0566-21-7575	0566-25-0985	187
新宿区立**西戸山幼稚園**	佐藤　暁子	東京都新宿区百人町4-7-1	03-3362-0400	03-3360-1258	71
刈谷市立**小垣江東幼稚園**	鶴崎　冨美子	愛知県刈谷市小垣江町上沢渡33	0566-23-5450	0566-25-0990	110
刈谷市立**富士松南幼稚園**	久米　陽子	愛知県刈谷市今川町山脇58番地	0566-36-0614	0566-36-1295	243
西尾市立**福地北部保育園**	三矢　君代	愛知県西尾市細池町天神東11	0563-57-3804	0563-57-7346	104
社会福祉法人 **大野町保育園**	松金　明栄	石川県金沢市大野町4-18-11	076-267-0136	076-267-0428	90
社会福祉法人若竹福祉会 **山鳩保育園**	徳永　ゆき子	京都府八幡市男山金振14-1	075-981-0982	075-981-6040	280
常磐会短期大学付属泉丘幼稚園	渡邊　芳子	大阪府堺市三原台3-3-1	072-291-0393	072-291-4093	124
岡山市立**高島幼稚園**	大野　鈴子	岡山県岡山市国府市場131	086-275-1163	086-275-1163	188
北九州市立**八幡東幼稚園**	谷口　晴美	北九州市八幡東区高見3-1-32	093-652-2087	093-652-2087	82
社会福祉法人顕真会 **よいこのもり保育園**	小笠原　文孝	宮崎県宮崎市和知川原3-13-1	0985-29-0077	0985-29-0961	60
社会福祉法人さつき福祉会 **南さくら保育園**	﨑村　英樹	宮崎県串間市大字北方7358-2	0987-72-5618	0987-72-5672	90

※ご応募いただいた時点の情報です。

■「実践事例集」の作成にご協力いただいた当プログラム推進委員の先生方

秋田　喜代美　東京大学大学院教育学研究科教授
中澤　潤　千葉大学教育学部幼児心理学研究室教授
福元　真由美　東京学芸大学教育学部幼児教育学科専任講師
森　眞理　東洋英和女学院大学人間科学部人間科学科助教授
横山　文樹　昭和女子大学短期大学部初等教育学科助教授

発行　2004年（平成16年）6月25日
無断転載を禁じます。

ソニー幼児教育支援プログラム　活動紹介

■ 保育実践と保育計画の募集

「科学する心を育てる」をテーマとして、3歳～5歳児の子どもたちの豊かな感性と創造性の芽生えを育む教育に取り組んでいる全国の幼稚園・保育園から、保育実践と保育計画を募集しています。そして、優れた内容を支援して発信し、より多くの先生方に活用していただくことを目指しています。

是非、勇気を持って、楽な気持ちで、チャレンジしてみてください。皆様からのご応募をお待ちしています。

募集内容、日程、助成、応募方法など詳細については、ホームページをご覧ください。

■ 優秀プロジェクト園・実践発表会

「ソニー幼児教育支援プログラム」に入選した優秀プロジェクト園は、次年度に「科学する心を育てる」というテーマで実践発表会を開催しています。公開保育・研究発表・シンポジウム・記念講演などを行い、「科学する心を育てる」実践について、参加された方と一緒に考え、理解を深めていただくことを目指しています。

実践発表会では、各園の優れた実践や創意工夫を共有するだけでなく、地域の幼稚園・保育園・小学校との交流も生まれています。是非、ご参加ください。

実践発表会の開催予定・開催レポートについては、ホームページをご覧ください。最新の情報がご覧いただけます。

＜2004年度＞

7月	2日	（金）	もいわ幼稚園（北海道札幌市、公立）
8月	10日	（火）	八幡東幼稚園（福岡県北九州市、公立）
9月	17日	（金）	大野町保育園（石川県金沢市、私立）
10月	16日	（土）	会津若葉幼稚園（福島県会津若松市、私立）
10月	21日	（木）	二葉幼稚園・二葉つぼみ保育園（東京都品川区、公立）

＜2003年度＞

7月	18日	（金）	もいわ幼稚園（北海道札幌市、公立）
7月	29日	（火）	八幡東幼稚園（福岡県北九州市、公立）
10月	4日	（土）	こまどり幼稚園（秋田県秋田市、私立）
11月	7日	（金）	よいこのもり保育園（宮崎県宮崎市、私立）

■ 情報発信

- **冊子「Challenge」**

「ソニー幼児教育支援プログラム」に入選した優秀プロジェクト園と優良プロジェクト園の論文概要を紹介した冊子で、毎年発行されています。「子ども科学教育プログラム」の入選校も紹介されています。

- **「科学する心を育てる・実践事例集」**

全国から寄せられた優れた実践やユニークな取り組みを、幼稚園・保育園の先生方に役立てていただくために、実践事例やアイディア・工夫を詳しく掲載しています。

- **「ソニー幼児教育支援プログラム」ホームページ　<http://www.sony-ef.or.jp/preschool/>**

本プログラムの応募要項、入選園の論文内容、実践発表会の開催内容、講演会レポートなど、タイムリーな情報を発信しています。ぜひご覧ください。

＊応募要項や冊子をご希望の方は、ソニー教育財団までお問い合わせください。

Tel. 03-3442-1005　Fax. 03-3442-1035

http://www.sony-ef.or.jp/

科学する心を育てる

ー豊かな感性と創造性の芽生えを育むー

- 子どもたちが、すごい！ ふしぎ！と身の回りの出来事に驚き、感動し、想像する心。
- 子どもたちが自然に親しみ、自然の不思議さや美しさに驚き、感動する心。
- 子どもたちが身近な動植物に親しみ、様々な命の大切さに気づき、様々な命と共生し、人や自然を大切にする心。
- 子どもたちが、くらしの中で「人や、もの、出来事」とのかかわりを通して、物を大切にする心、人としての守る道を身につけ、感謝する心や思いやりの心。
- 子どもたちが、遊ぶ喜び、学ぶ喜び、そして共に生きる喜びを味わう。
- 子どもたちが「身近な出来事、人やもの、自然」とのかかわりを通して、「なぜ？ どうして？」と不思議に思い、考える心。「なぜ？ どうして？」の答えを見つけたり、分かったときの喜び、楽しさ。そして、好奇心や創造性を育んでいく。
- 子どもたちが、自分の思いや考えを、様々なかたち（身体表現、言葉、音、造形・絵画、ものづくりなど）で表現したり、考え・創り出していく楽しさを体験するとともに、やり遂げる意欲を身につける。（そこから様々な表現としてのアートが生まれる過程全体を視野に入れています。）

財団法人 ソニー教育財団

〒140-0001 東京都品川区北品川4－2－1　御殿山アネックス2号館4階
Tel 03-3442-1005　Fax 03-3442-1035　E-mail info@sony-ef.or.jp
http://www.sony-ef.or.jp/